

『喧嘩百景』 第1話～第10話

井沢さと

『喧嘩百景』

作成当初は「喧嘩八景」というタイトルでした。でも、あたし、こういう話、好きなんで、いくら増えてもいいようにと、最近タイトルを変更しました。

一話完結型の短編集です。

〇〇VS〇〇という形式を取り、ただただ登場人物が喧嘩しているという……かなりくだらない話です。今のところ竜ちゃんの敗戦記録集みたいになっている…。

元々【お茶会同好会シリーズ】の一部として書き始めたんですが、そのうち【惑星ブルージアの盗賊シリーズ】のキャラでもやってみたいです。

「不知火羅牙VS緒方竜」

【お茶会同好会シリーズ】主人公不知火羅牙さんと、同シリーズ中最も蔑ろにされている緒方竜の対戦。常勝不敗を誇る関西人の転校生緒方竜、設定的にはかなりおもしろい役なのだが、実力を充分発揮できない内に羅牙さんに敗退。ために、以後誰にも相手にしてもらえず、いつまでたっても実力を見せられないでいる。

「緒方竜VS石田沙織」

【お茶会同好会シリーズ】で最も蔑ろにされている竜ちゃんと、最も世の中をなめている女子高校生石田沙織の対戦。本来なら最も主人公体質の竜ちゃんが、お茶会同好会なんかに関わったために、超ひどい扱いを受ける（作者から）。

「日栄一賀VS緒方竜」

その昔、最強最悪と呼ばれた一賀ちゃんと相変わらずひどい目に遭

う緒方竜の対戦。身体だけは丈夫な竜ちゃんだから可能なカードと言える。銀狐は昔半殺しの目に遭ったと言うが、克紀の催眠術でネジの外れた一賀ちゃんが相手だとホントに殺されるかもしれない。

「日栄一賀VS銀狐」

最強最悪時代の一賀ちゃんと、竜ちゃんに次いで（作者から）ひどい扱いを受けている銀狐の対戦。一賀ちゃんの体調が絶不調だから可能なカード。それでも銀狐は半殺しの目に遭う。前回にも増して痛そうな上、笑いが無い。酔ってるな君たち。環女史、何とかして。

「日栄一賀VS銀狐」2

第4話の直後のお話。タイトルは銀狐だが半分を過ぎるまで出てこない。やられキャラを無理矢理設定したが、その設定がとも恥ずかしい。でも断片的に残っている昔の設定を活かそうとするとこうなってしまうのだ。いや、ホント、恥ずかしい。裕紀、浩己、もうやっておしまいっ。

「成瀬薫VS緒方竜」

看板に偽りのある一作。一応薫ちゃんが出てきますが、竜ちゃんと和やかにお話をするだけ。喧嘩にはなりません。喧嘩らしいことは彩子さんが代わりにやっちゃってます。構成なんてものは考えず、竜ちゃんの好きにやらせたら、こんなにページ数超過になっちゃいました。やれやれ。

「成瀬薫VS銀狐」

作者もあるとは思っていなかった薫ちゃんと銀狐の対戦。突然ふつてわいた（笑）。過保護銀狐の仕業。あんたたち、そんなに頑張ってる自分たちがきついわよっ。作者、意地悪なんだから。まったく。

「銀狐VS田中西」

女の子にはからきし(笑)な銀狐と凶暴な女(笑)田中西^{あま}さんの対戦。作者に蔑ろにされているため、またしても銀狐は痛い目に遭う。でも西さんは喧嘩好きってわけじゃないからこの後は本編での活躍を待つ。ホントかつ。

「緒方竜VS松本王子」

相変わらず作者に蔑ろにされているシリーズのお人好し竜ちゃんと、さおりちゃんと同じくらい世の中をなめている松本王子様の対戦。この話で一番の貧乏くじを引かされたのは王子様の保護者、天野光だったね。甘いよ、天野。

「榊征四郎VS碧嶋真琴」

こと真琴ちゃんに関しては我を忘れてしまう征四郎くんと、こと美希ちゃんに関しては常軌を逸している真琴ちゃんの対戦。征四郎くんにとっては全くもって不本意な一戦。でも、長期にわたる交際権を獲得できたじゃん。よかったね、征四郎くん。

不知火羅牙VS緒方竜

「成瀬薫うちゅうんはあんたか」

教室の入り口で、身を屈めなければ鴨居に頭をぶつけてしまうほどの長身の一年生が、彼を待っていた。

「そうだけど、何か？」

薫はその一年生の挑戦的な視線にいやな予感を感じて眉を顰めた。

「緒方竜や。今日転校してきたんで挨拶に来さしてもらた」

雰囲気からして、竜の言う挨拶とは決して穏便なものではなさそうだった。

しかし、

「それはどうも御丁寧に。全校を回ってるのか？大変だな」

薫はすつとほけて彼の横を通り抜けようとした。

「んなわけないやろ。あんたに挨拶に来たんや」

竜はすつと移動して薫の進路に立ちはだかった。

「どつかで会ったことあったっけ？」

「惚けんや。あんたが龍騎兵の総長やちゅうんは聞いたんやで」

物凄い勢いで睨み付ける竜に、

「はあ？」

薫は思いっきり呆れ顔を作って応じた。

「どうしたの？薫ちゃん」

教室の出入口を二人が塞いでいるので中から出てきた女子生徒が何事かと声を掛けた。

「たぶん人違いだよ。龍騎兵の総長に挨拶に来たんだったさ」

薫は竜を避けて、道を開けた。不審な顔をしながら彼女が通り過ぎる。

「人違いやと？」

竜は眉をつり上げた。

「そうねえ、だって、龍騎兵って、もうずいぶん前に解散したのよ」

「今この辺りを仕切ってるのって言ったら三高じゃないかしら？」

「お前みたいなのがおっかない顔して行ったから、やられると思って龍騎兵の名前出したんだよ」

薫はそう言って手を振った。

「ほな、何であんたの名前が出てきたんや」

「知らないよ。俺が入ってるんのはお茶会同好会だけだよ」

「何やそりや」

空振りを喰らわされて拍子抜けする竜に「じゃな」と、もう一度手を振って薫は部屋を出ていった。

★

★

「日栄一賀うちゅうんはあんたか」

クラスの人間から居所を聞いて、竜は保健室へ向かう通路の途中で彼を捕まえた。

龍騎兵のナンバー3。名目上のナンバー2、内藤彩子を除けば、実

質ナンバー2のはずである。

薫に体よく逃げられた竜は、今度捕まえた彼にはまずがっかりした。——こいつはちゃうわ。

竜より頭一つほど背の低い色白の二年生は、クラスメイトの説明だと喘息持ちで、時折保健室の厄介になっているらしかった。

振り返った彼の名札には確かに日栄と書かれていたが、華奢な体つき、端正な顔立ち、顔色の悪さはどう見ても「最強最悪」と噂される人間と同一人物とは思えなかった。

「僕に何か用？これから保健室に行かなくちゃならないんだけど」
彼は竜を見上げて小首を傾げた。

「あなた、龍騎兵の日栄一賀か？」

竜は念のために訊いてみた。

日栄一賀なんて間違えようもない名前なのに、——やっぱあいつら
デタラメ言いよったんか。

「うん。日栄一賀は僕だけど。でも龍騎兵はもう解散したよ」

一賀はどちらとも取れる言い回しで答えた。

薫のように無関係だとは言わなかった。

少しかすれた一賀の声には、気管支から来る雑音が微かに混じって
いた。——喘息持ちか。

竜は口の中で「もうええわ」と呟いて一賀に背を向けた。

★

★

「何やうちのクラスメイトかいな。授業出とくんやったで」

龍騎兵の三本柱と言われる、三人の最後の一人、不知火羅牙はまだ
一年生だった。

しかも一年四組、彼のクラスメイトだ。

竜は授業の終わった教室に残っていた女子生徒から不知火羅牙の行
き先を聞き出した。

「羅牙ならお茶会の人たちと図書館よ」

——お茶会？図書館？——竜は眉間に皺を寄せた。

どうなっとんのや。龍騎兵は。——こいらの不良どもはあないに
びびりあがとったやないか。

「不知火羅牙っちゆうんはどいつや」

竜は図書館で手当たり次第に訊いて回った。

結局、五階建ての図書館の、五階にある会議室の一つで、漸く竜は
「彼女」に会うことができた。

「あたしが不知火羅牙だけだ」

彼女は言った。

その会議室にはどういうわけだか、成瀬薫とさつき薫の教室にいた
女子生徒が一緒だった。

「女：かいな」

あからさまにがっかりする竜に、薫が面白そうに声を掛けた。

「お前、まだ挨拶して回ってたのか」

「礼儀正しい転校生ねえ」

薫の横で女生徒もくすくすと笑う。名札には「内藤」と書かれてい
た。

——内藤、内藤彩子か。こいつらそろって惚けやがって。

竜はぎりりと歯を噛み締めた。

「成瀬薫。やっぱあんたやったんやな」

「だから、龍騎兵は解散したって言っただろ」

薫はティーカップで紅茶を啜りながらそう言った。

「龍騎兵がのうなととったってかめへん。あんたの名前はまだこの
辺りじゃ効いとるんや。日栄とあんたとどっちが最強か知らへんけ
ど、あいつのあの様じゃ、どうせ勝負にやならへん。総長自ら相手し
てもらうで」

竜は部屋の人間を睨み付けながら凄んだ。
部屋には薫、彩子、羅牙以外に女生徒が三人いるだけだった。

女に囲まれてへらへらしよって。
腑抜けとんなら俺様がきっちり引退させたる。

「緒方、あたしに挨拶に来たんじゃないのかよ」
もう薫以外眼中にない竜に羅牙が声をかけた。

「女にや用あらへん」

取り付くしまもない竜に、
「羅牙を女だと思わない方がいいぞ」
薫が忠告する。

「うちは女の方が強いからなあ」

と、ティーポットから紅茶を注ぎ足す彩子を見上げながら付け足す。

「運動したいのならあたしが相手になってやるって」

茶請けらしい菓子をつまみながら羅牙。

「不足ならボクも加勢しようか？」

綺麗な黒髪のとてもしずく瞳には緑のなさそうな色白の娘がくるりとした黒目がちの瞳を輝かせる。

「俺は龍騎兵の総長に用があるんや。関係ないやつあ黙っとれ」

竜の言葉に薫は小さく肩を竦めた。

「しょうがない。表に出るか」

上を指差す。図書館には屋上があった。

「そうこな」

竜は嬉しそうに笑った。

★

★

「来いよ、緒方」

屋上で竜の前に立ちはだかったのは羅牙だった。

他の連中は、部屋から机やら椅子やら茶道具やら持ち出してきて、茶会の続きを始めようとしていた。

「お前ら、なめとんのかっ。成瀬薫っ、何であんたが相手せんのか」

竜は完全に頭に来ていた。

「俺はいいよ、お前の勝ちで」

薫の方は全くやる気がない。

「そんな聞けるかいっ、勝負せえっ」

竜は構わず薫に掴みかかった。

「あたしが相手するって言ってるだろ」

竜と薫の間に羅牙が飛び込んだ。

竜の両手首を掴む。

二人は正面から四つに組む形になった。

——何や、この女。何ちゆう馬鹿力や。

竜は手首を掴む羅牙の力に驚いた。

握力も腕力も男のそれ以上、いや、彼自身にも劣らないかもしれない

かった。

「やる気になったか？」

羅牙はぎりぎり竜の手を外側へ開いていった。

——確かにこの女ただもんやあらへん。けど——。

「あほいえ。女を殴れるかいな」

羅牙は竜の右手を思いつきり引いて、その場に引き倒した。

「じゃあ、殴らないであたしに負けを認めさせてもらんよ。そして

ら薫ちゃんとやらせてやるよ」

「羅牙、勝手なこと言うなよ」

薫が不満そうに抗議したが、羅牙は「いいからいいから」と笑って

手を振った。

「今の言葉、忘れんなや」

竜は身を起こして砂を払った。

この馬鹿力女、ふんづかまえてきゆうう言わしたる。

竜は羅牙に掴みかかった。

しかし、彼女は馬鹿力だけではなかった。軽い身のこなしですいと彼の腕をかくぐり、紙一重のところでもどうしても捕まえることができない。指先が時折触れるので、竜のいらいらは余計につのった。

後ろへ後ろへ逃げる羅牙を間雲に追い立てる、広くない屋上で、

彼女はすぐにコンクリート製の手すりに背をついた。

もう後はない。

羅牙は拳を握ってウインクした。

「一発やっとうか？」

言葉と同時に彼女の姿が消える。

「何やっとう！」

羅牙は身を屈めて竜の懐に飛び込んでいた。

「早いっ。」

竜は避けられないと覚って身構えた。

一発はもううたる。けどそれで終いや。逃がさへんで。

攻撃してきた今が、ちょこまかと逃げ回る羅牙を捉える絶好のチャンスだ。いくら馬鹿力とはいえ女の細腕で一発殴られたくらい屁でもない——竜は打たれ強さには自信があった。

しかし、羅牙は彼の懐で身を捻った。鳩尾に拳ではなく痛烈な肘撃ちが叩き込まれる。彼女はそのまま腕を伸ばしてもう片方の手を添え、続けざまに竜の脇腹を殴りつけた。

「な——！」

横から殴りつけられ、竜はバランスを崩して蹠跟めいた。

すいと下がる羅牙に手を伸ばすが届かない。

竜は痛みを堪えて追いつがった。

「効いたで、こん畜生。女のくせに喧嘩慣れしとるやないか。」

羅牙はひょいと手すりに跳び上がった。

逃がさへん！

竜は手を伸ばして何とか彼女の腕を掴んだ。

「掴まえたで」

見上げると彼女はまだ笑っていた。

「よっ、と」

羅牙の手が竜の腕に掛かる。

掛け声とともに彼女は竜を引き上げた。

「うそやろ、こんな——。」

竜の身体は軽々と宙を舞った。

手すりを乗り越え、次の瞬間には背中から図書館の外壁に叩き付けられる。

竜の身体は五階建ての図書館の屋上から吊される形になった。

細身とはいえ七〇キロはある竜の身体を小柄な羅牙が腕一本で支える。

背中から叩き付けられたので、竜の眼前には五階からの風景が広がっていた。すうっと背筋が冷える。

自分を支えているのが小柄な少女一人と知っているのに、竜は身動き一つできなかつた。下手に動けば二人とも真逆様になりかねない。

彼はそろーっと上を見上げた。

「聞いているよ、百戦百勝、常勝不敗ってね——どうだい？初めて負けた気分は？」

ま、負け？——負けたやと？この俺が？

「まだや…、まだ負けてへん」

竜は羅牙の手首を握り締めた。

汗が滲む。

羅牙がにやりと笑った。

「あたしの勝ちにしとこうや、な、緒方。みんなにや黙っといてやるからさ」

がくがく震えている竜の手を羅牙はぎゅっと握ってやった。

「ま、ま、ま、負けてへんで、こん畜生。じ、じ、地面の上やったら、こ、こないなこと…。」

竜は、足先からだんだん血の気が引いて、身体が凍り付いていくのを感じていた。極度の高所恐怖症——。

竜の初めての敗北はこうして決定した。

緒方竜 VS 石田沙織

「緒方あ、相変わらず暇そうにしてるじゃないか」

「竜ちゃん、御指名だつてさ、相手になってやんなよ」

不知火羅牙と碧嶋美希は、小柄な娘の後ろに保護者のように付き添ってやってきた。腕組みをしてにやにや笑っている。

「俺を？指名やて？」

窓からグラウンドのサッカーを見ていた緒方竜は、バックのコーヒー牛乳のストローをくわえたままでそう言い、ちうーっとそいつを吸い上げた。

「どーいうこっちゃ、そりゃ」

竜の手元でコーヒー牛乳がこぼぼと音を立てる。

「どうもこうも。入部希望者さ。あんたになら負けないってよ」

羅牙は意地悪な笑みを浮かべた。

「何やて？」

竜は三〇センチ上から三人を見下ろして片眉をつり上げた。

入部希望者やて？——うちにかいな。

「うち」——彼らの所属しているお茶会同好会は、正規の部活動ではない。まだ予算も付かない同好会だ——いやそれはどうでもいいことだが——お茶会同好会は、ただの同好会でもなかった。

「一年四組、石田沙織。宜しくっ」

羅牙と美希の前に立つひとときわ小さい娘は、景気よく言い放ってガツポーズを取った。

竜は彼女に見覚えがあった。転校生の彼とはいえ、同じクラスの間顔くらいはもう覚えている。その娘は確かに一の四、彼のクラスメイトだった。

「うちは希望して出たり入ったりするところちゃうやろ」

竜は不機嫌そうな顔で三人を順番に睨み付けた。

「特例さ。それなりの実力があるならいいよって、薫ちゃんがオツケーしたんだよ」

「会長が？」

「そ、それで誰かとちよいと手合わせしてもらったことになったのさ」会長が——お茶会同好会会長、成瀬薫が許可したというのなら仕方ない。竜はちうちうちコーヒー牛乳を啜った。

けど、何で俺なんや——他の奴でもええやないか。

「あんたになら負けないってよ」——羅牙の言葉を思い出す。

俺をなめやがとんのか。

竜はずびーっと空気を吸い込んでストローを放した。

確かに「こつち」に来てからは実力を見せる機会がなかったから、誰も彼の力を知らないのかもしれない。竜自身も、羅牙を除いてお茶会同好会の誰とも手合わせしたことがないので、メンバーの力関係の比較などしようもなかった。

せやけど、俺様の常勝無敗記録くらいは聞いたことあるやろ。

転校当時、彼の喧嘩達者の噂は確かに評判だった。それは近隣校の不良たちから伝わって、一般の学生にまで広がった。

連むのを嫌い、どこのグループにも属さず、彼を目障りだとして潰そうと躍起になる連中を一人で相手にしてきた強者。——中学生の時代から百戦して百勝、関西圏では彼の名を知らぬ者などいないほどだった。

しかし、この学校に来るまで常勝無敗を唱われた彼は、転校早々、不知火羅牙に不本意な一敗を喫していた。——あのせいだ。

「女相手やと、腕が鈍るんや」

竜はバックを握り潰して部屋の隅のゴミ箱へ投げ入れた。

元々彼は女は相手にしない主義だった。だが、こつちへ引越してきて登校するまでの数日の内に、この辺りの不良たちから聞き出した

名前の中にあつた、「不知火羅牙」というのがまさか女の名前だったとは——それで、転校の挨拶代わりの一戦で彼は彼女に無敗記録をストップさせられたのだった。

「緒方、沙織ちゃんを侮らない方が身のためだよ」

美希がとりあえずの忠告を与える。

しかし、侮る以前に、石田沙織は女で、しかも体育の授業で見る限りでも決して腕力があるように見えぬ、さらにチビッコだった。

「何で俺が女子供の遊び相手せにやらんや。お前らが遊んでやったらええやないか」

「だから御指名だつて、竜ちゃん」

あまり乗り気でない竜に美希は明るく手を振った。

「おう、関西人。どっからでもかかってきなさいっ」

沙織は肩を回して拳を突き出した。

「沙織ちゃんに」発でも当てられたら竜ちゃんの勝ちにしてあげるからさ」

美希の言い方は、竜の神経を逆撫でしようとしているのが見え見えだった。——人を挑発しよつてからに。

「泣かずぞ、おんどれ」

竜は拳を握つて、はあつと息をかけた。

「やーい。かかってこーいっ」

沙織は、かなり小馬鹿にした口調でそう言うなり、美希と羅牙の間をすり抜けて部屋から飛び出していった。

「何やつ、逃げんのかっ」

意表を突かれて竜は大声で突っ込んだ。

「運動は屋外でねーっ」

廊下から沙織の声が返ってくる。

「竜ちゃん、屋上屋上」

美希がにこにこ天井を指差した。

何で鬼ごっこまでせにやらんのか。

竜はちよいとその気になってしまった自分の気の短さを後悔した。

「いくよ。緒方」
野次馬根性丸出して面白がっている羅牙たちに促されて、竜は泓々教室を出ていった。

★

★

石田沙織は屋上のコンクリートの手すりに腰掛けて三人を待っていた。高いところなどあまり好まない竜にとっては他人事でも気持ちのいいものではなかった。

なのに、

「待ちかねたぞつ、関西人」

と、沙織は手すりの上で立ち上がった。

「やめんかつ、危ない」

ぞくぞくと寒気を感じた竜は沙織を怒鳴りつけて、何とかしろとばかりに羅牙と美希を振り返った。

「大丈夫大丈夫、落ちやしないって」

「竜ちゃん、高所恐怖症？」

二人は全然お構いなしでもう完全に観戦モードに入っていた。どこから持ってきたのかパイプ椅子に腰掛け、美希などはどこから出したのかティーカップで茶を啜っている。

「何くつろいどんのやつ」

竜はとりあえず関西人らしい突っ込みをかまして、沙織に向き直った。

「もう、何でもええ、かかってこいや」

沙織は手すりからびよーんとわざわざ飛び上がるようにして降りてきた。宙返りこそしはしなかったが、やりかねない身の軽さだった。

「かかってくるのはそっちだぞ、関西人」

沙織は片手を腰に当て拳を突き出した。

「泣かす」

竜は拳を握って殴りかかった。

先手必勝。軽く小突いて終わりや。

大阪では常勝を誇っていただけあって、緒方竜の運動神経は抜群だった。腕力も並外れていたし、体力も人五倍くらいはありそうだった。

沙織の方は、五〇メートル走と走り幅跳びこそ陸上部並だったが、あとは級外ぎりぎりでも、とても竜に喧嘩を売ってこれるほどの身体能力を持ち合わせているとは思えなかった。

竜は寸止めしてやるつもりで沙織の腹部に拳を繰り出した。

瞬発力でもリーチでも竜の方が数段勝っている。

二人の距離と踏み込みのタイミングから言っても、沙織にかわせるはずがなかった。

しかし。

沙織は端から避けるつもりなどなかったのだ。ひんやりした小さな手が竜の拳を押さえていた。

受け止めたやと？

一瞬のことですごなったのか竜にもよく解らなかったが、沙織は竜の拳を受け止めたわけでもなかった。現に抵抗が全くない。いくら寸止めするつもりだったとはいえ、軽く当てるつもりで、そこまではそのつもりの力を込めているのだ。受け止めたのならそれなりの反作用で抵抗があるはずだ。なのに沙織の手は触れているだけの軽さだった。

一瞬の後に沙織の身体がふわりと後ろへ跳び退く。

「さすがに早いね。なかなかの瞬発力だ」

と、笑顔で余裕さえある。竜は当てないように細心の注意を払って足を振り上げた。

今度は、彼女は目をぱっちり開けて動きさえしなかった。

踵が鼻先を掠めて風が前髪を揺らしてもびくりとも動かない。

「こつちが当てるんと分かっとんのか。」

竜はくるりと一回転して間合いを取った。

「緒方あ、いいから当てるつもりでやってみなよ」

「当てられるならねー」

ギャラリィから声がかかる。

「へーい、かもーん」

沙織が人差し指でちよいちよいと手招きした。

と、竜の拳が音を立てた。あんまり強く握りしめたので関節が鳴ったのだ。その拳を震わせながら、

「絶対、泣かす」

竜は沙織を睨み付けた。

「単純だねえ、あいつは」

「ホントに」

後ろのギャラリィの言葉ももう聞いちゃいなかった。

隙だらけで間合いを取ろうともしない沙織に、猛然と打って掛かる。狙いは全部ボディだ。――顔だけは勘弁しといたる。

しかし、当てる気になっても竜の拳は、いつまでたっても沙織には届かなかった。風に漂う羽根のように紙一重のところですからるりと逃げられてしまう。

足を払おうとしてもだめだ。軽いフットワークでそれかわされる。

「修行が足りんのう」

竜の攻撃をかくぐって、沙織は竜の顔のすぐ近くで囁いた。

ひくつと竜のこめかみで血管が震えた。

「殺す」

竜は左足で思いきり踏み込んで、右のストレートと左のアップパーとおまけに右脚の膝蹴りをほぼ同時に繰り出した。

にっこり笑って沙織は右の拳をかわした。

その後のことは、どういうわけか竜にはスローモーション映像で見せられているように感じられた。

沙織は紙一重で、竜の右の拳だけをかわした。左拳は真下から顎を捉え、右膝は脇に完全に入っていた。

——しもた、当たってまう。

当てるつもりだったにもかかわらず、竜ははっとした。

沙織の笑顔はすぐ目の前だ。万に一つどちらかをかわせても、もう片方は確実に当たる。腹の方がダメージは大きいかもしれないが、顔の方を避けてくれ。竜は折った。

だが、沙織は笑顔のままどちらも避けなかった。

顔の前に二本指を立てて「ピース」をすると、それで竜の拳を受け止める。

いや、受け止めたのではない。最初と同じだ。右膝にも軽く手が触れる。

全く抵抗なく、沙織の身体は斜め後ろへぴょんと跳んだ。
んな、あほなあ。

「勝負あっただろ、緒方」

呆然とする竜に羅牙が声を掛けた。

「暖簾に腕押しってまさにこんな感じだよな」

美希もうんうんと頷く。

「やっぱ結果は見えてたよな」

頭の上からも声が降ってきた。

聞き覚えのある声に竜が振り向くと、屋上の階段小屋の上に成瀬薫が立っていた。

「会長お」

また、鈍くさいとこ見られてもうたんかいな。こん畜生。

「沙織に当てられないようじゃあ、いつまでたっても俺とは勝負できないなあ、竜」

お茶会同好会会長、龍騎兵総長兼西讃州連合総長成瀬薫は、にこにこ顔で竜の傍に飛び降りた。

「何事も力任せはだめってことさ。勉強になっただろ」

「緒方は力任せの典型だからね」

非常口からも人影が現れた。

「げっ」

日栄一賀。あいつもおったんか。

女性メンバーを除けば、実質、龍騎兵のナンバー2——。

転校初日、竜は薫と一賀に喧嘩を売った——が、面倒を嫌う二人には、全く相手にされなかった。薫の方は総長なんて呼ばれてるくせに、一般人に紛れ込んで、知らぬ存ぜぬを押し通し、一賀の方は喘息持ち

だとかで、青い顔で保健室へ逃げ込んだ。近隣の奴らから話は聞いてきたのだ。龍騎兵はこの辺りじゃあ最強のチームのはずだった。成瀬薫と日栄一賀と不知火羅牙はその龍騎兵の三本柱で、それぞれに

「伝説」を持っていた。今もその「伝説」は生きている。それなのに、当のこの学校じゃあ龍騎兵はとくに昔話になってしまっていた。

呑気そのものの学校で、竜は済し崩しにお茶会同好会に入会することになったのだった。

「薫ちゃん。あたし合格ー？」

沙織は頭の上で腕を振りながら薫に言った。

「沙織、ちゃんと言うな、ちゃんて」

「ええーっ、一賀ちゃんはいって言ったもーん」

「一賀と一緒にするなよ」

遠ざかっていく声とともに、緒方竜の二度目の敗北が決定したのだ

だった。——お前ら、いつかやっつた。竜は拳に誓った。

日栄一賀VS緒方竜

「どうせ相手にはしないとと思うけど、一賀は怒らせない方がいいと思うぞ」

前会長成瀬薫はそう言っていた。

「うーん、俺たち昔、半殺しの目に遭いましたからねえ」

銀狐も口を揃えてそう言った。

現お茶会同好会会長、日栄一賀。

緒方竜がこの学校に転校してきた時、日栄一賀の地位は、お茶会同好会イコール龍騎兵のナンバー2として確立していた。

「何でや。何であんな年中風邪ひいたような奴に俺様が勝てん言うねん。」

竜はやってみる前から結果を宣告されて憤慨していた。

しかも、当の一賀は病気がちを理由に彼を相手にしようとしなかった。

「いつかやっつたる。」

その「いつか」は永遠に來ないはずだった。

それが。

「貴方の望みを叶えてあげましょうか？」

そいつが竜に囁いた。「白黒つけさせてあげますよ」

一年の学年首席、佐々克紀はにっこりと笑った。

★

★

夜遅く、竜は克紀に電話で呼び出された。

何や、こない運うに。

不審に思いながら竜が指定された学校横の公園へ行くと、そこには

克紀ではなく一賀が待っていた。

「日栄一賀。何であん人が。」

竜はきよろきよろと克紀の姿を探した。いるわけないと、竜も薄々感じていた。

公園のベンチに腰掛けていた一賀が、ゆらりと立ち上がって竜の方に近付いてくる。

「竜」

一賀は二〇センチ近く背の高い竜の肩にぼんと手を置き、下から彼の顔を見上げた。端正な顔の、ぱっちりとした奥二重の目が上目遣いに彼を見る。

ざわっと竜の肌が泡立った。

「ちやう。こいつ、いつもと——」

俺のこと、名前でなんか呼んどらへんかった。

一賀の目に殺気を感じた竜は後ろへ跳び退こうとしたが、それよりも早く、一賀の右拳が竜の鳩尾にめり込んだ。

「がっ…あ」

胃の中のものが押し上げられ食道を逆流する。

前のめりになった竜の首筋に一賀が容赦なく腕を振り下ろす。

「…あ…」

強烈な一撃が竜の頭蓋を揺らした。

脳震盪を起こして彼は地面に膝をついた。

景色が歪み吐き気が込み上げる。

「立てよ」

目眩が治まらないうちに、一賀が彼の襟首をひつつかんで無理矢理に引き起こした。

中腰になったままの竜の腹に今度は一賀の膝が食い込む。

「げ…ふ…」

堪らず竜は胃の中のを吐き出した。そのまま地面に倒れ伏す。

たった三発で彼が這い蹲るなどということは初めてのことだった。

「最強最悪——ここいらの奴らが俺のことをそう言わなかったか？」

一賀は竜に馬乗りになると左腕——竜の利き腕を取って思いつきり捻りあげた。

肩が鈍い音を立てる。

一賀はさらに手首を掴んだまま肘にも手をかけた。

——利き腕潰すつもりかっ。

竜は身体を捻って一賀を振り払った。

左肩に激痛が走る。

——こないに簡単に肩外しよってからに。遠慮つちゆうもんがないんか。

「最強やと？——あんた、そない性悪で、よう今まで猫被つとったもんやな」

竜は重い左腕を掴んで近くの木に打ち当てた。

「ぐっ……う」

痛みに声が漏れる。

一賀は感心したように「へえ」と呟いた。

「自分で肩を入れたのか。少しは根性あるな」

竜は肩を回し、

「手加減なしでやらしてもらうで、こつちもそない余裕ないんでな」
べっ、と、唾を吐いた。

「来いよ」

一賀はくいっと顎をしゃくった。

竜は拳を握り締めて一賀に殴りかかった。

今までのお茶会同好会メンバーの戦い方から見て、ただ殴りかかっても避けられるだろうと竜は思っていた。それは計算の内、次のアクション、次の次のアクション、それで勝負するはずだった。

しかし、腹を狙って時間差で繰り出した、右の拳は受け止められ、左は手首をいとも簡単に掴まれてしまった。

馬鹿力には定評のある彼のパンチを、日頃は青い顔をして病弱そのものの一賀が、正面から受け止めるなんて、竜には信じられないことだった。

「逃げるが勝ち」がお茶会同好会の連中のやり方ではなかったのか。

「……いっ……っ……」

竜は掴まれた手首にちくりとする痛みを感じて声を上げた。

彼を見上げる一賀の唇の端が少し持ち上げられる。

竜は痛みを堪えてそれを見下ろした。

痛みに混じって手首に感じたことのない違和感が広がる。

彼を掴んでいる一賀のひんやりした手の感触に熱いものが滲む。

ほかたり。

何か滴が地面に落ちる音が竜の耳に届いた。

——こ……こ……

一賀の色白で細いすらりとした指の、女の子たちのように綺麗に生えそろえた形のいい爪が、竜の手首に食い込んでいた。

血が滲んで滴り落ちる。

——最悪。その意味が竜にも漸く理解できた。彼には生身の人間の

身体を傷つける時のいやな感触に対する遠慮というか躊躇いがないの

だ。——刃物だとか何だとか、凶器を使わず素手でそれができるなん

で。

何ちゆう性悪や。

竜は力任せに一賀の手を振り解いた。

手加減しないと云った竜でさえ、相手を殴るときには僅かに加減はしている。それは意識的なものではなくて、相手を傷つけまいとする無意識のものだった。ちよいと痛い目を見せる以上に傷つける必要がないからだ。骨が折れたり肉が裂けたりする感触は決して気持ちのい

いものではない。それを避けるための遠慮が力をセーブさせる。
この華奢な一賀がこれだけの力を出せるのはその躊躇いがないから
なのだ。

「竜、お前は人が良すぎるんだよ」

一賀は血の付いた指を少し舐めてみて眉を顰めた。

「あんたみたいな性悪でうて結構や」

竜は左手首の血を振るってもう一度一賀に殴りかかった。

相手の正体は分かった。

それ相応のやり方をさしてもらおう。

肋の一本や二本は覚悟してもらわんと。

竜は一賀に捕まらないように続けざまに攻撃した。——捕まったら
何されるかわからへんからな。

しかし、最初は五分以上に竜の攻撃を受けていた一賀も、絶え間な
い攻撃に次第に肩で息をするようになってきた。

——喘息持ちちゅうんは、ほんまなんか？

やっぱ、身体は弱いんか。

なら。

彼の強さから言って、殴られることには慣れていないと竜は踏ん
だ。傷つけられることには慣れてないはずだ。

竜は馬鹿力と体力にだけは自信があった。打たれ強いということも
彼の常勝記録を支えていた。

一発や。一発当てりゃあええ。

それで片付くはずや。

竜はタイミングを計り、力を溜め、渾身の一撃を一賀の腹に叩き込
んだ。

が。

竜の拳は一賀には届かなかった。

「やめないかっ」

声と同時に二人の間に薫が割って入った。

竜の腹に蹴りを入れ、一賀の両腕を掴んで引き離す。

「一賀っ！何やってるっ」

薫が怒鳴りつけると一賀はそのまま系の切れた人形のようにぐん
と後ろへ仰け反った。

「一賀、おいっ」

倒れ込む一賀の身体を薫が抱き留める。

何や一体、どうなっとんのや。

竜には、薫がなぜここに現れたのか、一賀がどうして倒れたのか、
さっぱり判らなかつた。

「竜っ、一賀に無茶させるんじゃないよっ」

薫は一賀を抱えて竜を怒鳴りつけた。

「せ…せやかて…」

仕掛けてきたんはそっちゃ。おまけに痛い目におうたんは俺の方
や。そいつ、ごつつ性悪やんか。

竜としては言いたいことはたくさんあったが、薫の剣幕にたじたじ
となつてそれ以上は言えなかつた。

薫はちらつと竜の手首の傷に目をやって、

「いや、悪い、お前だけが悪いんじゃないや」

と首を振った。

それでもまだ納得のいかない顔をしている竜に、

「環女史が教えてくれたんだ。あいつが、克紀が何か企んでるってな。

——たく、一年坊主にいいように躍らされやがって」

竜にはますます分からなくなった。

克紀が？企む？——で、何で、環女史が？

「お前もそのうち判ると思うけどさ、この辺りには妙な連中がうろ
うろしてんだよ。——一賀でさえこの様だ。お前ももう少し用心しろ」
薫の台詞はまだ謎だった。佐々克紀がそんなやばい人間なのか？そ

れともまだほかに何かあるのか？ 竜には想像もつかなかった。何に對して用心しろと言うのか。

「とにかく——こいつはホントに身体が悪いんだ。もう二度と無茶させるなよ」

薫は言った。

「すんまへん」

しょぼんと竜は謝った。

——せやけど、そいつほんまにむっちゃ性悪ですやん。

一賀に目を落とす竜の視線に気づいて薫はもう一度口を開いた。

「こいつだけは怒らすなつて言つたら。今じゃもう滅多に悪さはしやしないよ」

薫は一賀を抱き上げて踵を返した。

——お茶会同好会メンバーに、これで零勝四敗かいな。

薫に蹴られた腹を押さえて、竜は彼の後を追った。

★

★

次の日の放課後、授業を休んだらしい一賀が、部室などないお茶会同好会が活動の場として利用している図書館の一室に顔を出した。

「一賀ちゃん。どう？ 具合は」

不知火羅牙が声を掛ける。

「うん、大丈夫、午前中はきつかったけどね」

一賀は普段通りの様子で窓側の席に腰をかけた。

滅多にお茶会には顔を出さない神田環が、一賀のためにハーブの入った紅茶を入れて運んできてやった。

「ありがとうございます」

一賀は丁寧に礼を言って差し出されたカップを受け取った。

「緒方、あんたにや学習機能は付いてないのかい」

羅牙は今度は竜に向かって話しかけた。

「何やねん」

「身体動かしたいのなら銀狐でも相手にしなつて」

「そうそう、一賀ちゃんみたいな虚弱体質に喧嘩売らないでさ」

「そうよ、一賀ちゃんの顔に傷でも付いたらどうするの」

碧嶋美希と神田恵子も口を揃えて竜を非難げに言う。

「何や何やよつてたかつて。悪いんは全部俺かい」

怪我をしたのは自分だけなのに皆から散々言われて、竜は恨めしそうな目を一賀に向けた。

「緒方は僕の顔は狙わなかったもんねえ」

昨日とは別人の一賀がにっこりと微笑む。

——顔？ そういやそうやったかな。この綺麗な顔は手え出しにくいさかいな。

「会長、べっぴんやから」

「緒方はお人好しだよねえ」

一賀は笑った。

「馬鹿だね」

羅牙が決めつけた。

「そうそう、みんなからあれだけ忠告されてたのにさ」

「そうよ、脱臼とそれくらいの傷で済んで良かったわよ」

美希と恵子に続いてまた羅牙が口を開いた。

「薫ちゃんが止めてくんなきやさ、その左手か目玉の一つくらいなくなつてたかもよ」

彼女はそう言った。

——何、やと。どういうこつちや。お前らみんな、こいつの性悪、知つとつたんか。こん畜生。ほな、あいつのこともか、佐々克紀。畜生。みな根性曲がつとる。

リベンジや。——竜はまた拳に誓うのだった。

日栄一賀VS銀狐

「そいつが龍騎兵の日栄一賀だ。てめえらの好きにしゃがれ」
西讃第一中に転校してきたばかりの彼らに絡んできた高校生らしい暴走族グループは、逃げ回りながらも数を頼りに二人を目的の場所まで誘導することに成功したようだった。

海岸近くの公園の駐車場。そこは暴走族の集会場らしかった。バイクのエンジン音とヘッドライトの灯りが集まっている。

「派手な歓迎だなあ」

二人——銀髪の子方、相原浩己は呆れ顔で呟いた。
転校を繰り返している二人は、その容貌からどこへ行っても絡まれることが多かったが、こんな大歓迎は初めてのことだった。

しかしよく見ると、おかしなことに動いているバイクは一台もなく、ヘッドライトも、空を照らしていたりとか地面を照らしていたりとか、立ってさえないようだった。

「歓迎されたのは俺たちじゃなさそうだな」

双子のもう一人、相原裕紀は、眉を顰めてライトの光の中に立つ影に目を向けた。

「日栄一賀——か」

彼らに絡んできた連中は、二人が一筋縄ではいかない相手だと判断すると、前々から手を焼いていたその日栄とかいう奴にぶつけることを思いついたらしい。

「乗ってやるか」

兄の裕紀は弟の浩己を振り返った。バカな連中の短絡的な思いつきに乗せられるのは気に入らなかったが、これだけの人間を一人で片づけた中学生というのには興味をそそられた。

「最強最悪、ねえ」

浩己は、連中が日栄一賀を評したその言葉を口にした。

目の前に立つ小柄な影からは、そんな気は全く感じられない。

「ごほん。と、影は咳き込んだ。」

「次はお前たちか？俺は気分が悪いんだ。やるなら早くしろ」

掠れた声の合間にげいげいと喉が鳴っていた。

「あんた、本調子じゃないんじゃないか？」

裕紀は声を掛けた。

これだけの大人数を相手にしたのだ。息も上がっているだろう。だが、彼の様子はそればかりでもなさそうだった。

「五体満足で帰りたいなら、今やっつけ」

一賀の足元にバイクと一緒に転がる特攻服の男が半身を起こした。

一賀はものも言わずにそいつの喉を蹴り付けた。

「ぐえっ」と呻いて男がひっくり返る。

浩己は思わず首を竦めた。——他人事ながら息が苦しくなる。

「最悪」

裕紀は吐き捨てるように言った。

「来いよ」

一賀がくいつと顎をしゃくる。

「俺一人でいい」

裕紀は学生服の襟元を緩めて前へ出た。

——最強だか何だか知らないけれど、肩で息をしている相手に、「銀狐」とあだ名されて怖れられた俺たちが二人掛かりでやることもなからう。

国籍こそ日本だが日本人ではない彼らは中学一年でもう身長も百七十ほどもあった。目の前にいる日栄一賀は、暴走族たちの話では中学三年ということだったが、小柄で華奢で少女のように綺麗な顔立ちをしていた。

「時間稼ぎのつもりか？一遍に来いよ」

白人の彼らと変わらなくらいに白い肌。細くふわりとした髪。端正な顔立ちには不釣り合いな、強烈な殺気が小さな身体から溢れ出した。

——見てくれに騙されるなってことか。

「裕紀、油断するなよ」

浩己も気配を感じて裕紀に声を掛けた。

裕紀はゆっくりと一賀に近付いた。

体格では彼らの方が断然有利だ。今までの経験から言っても、同じ年頃の日本人に身体能力で負ける気はしない。しかし、体格だけなら地べたに転がされている連中だとして一賀よりも随分有利だっただろう。数だつて圧倒的に多い。それがこの有様だ。

決して侮ってはならない相手だ。

裕紀は様子を窺いながらそろりと一賀の方へ腕を伸ばした。

「！」

「裕紀！」

浩己は慌てて二人に駆け寄った。

一賀の動きは唐突で急激だった。裕紀の腕を掴んで前のめりに引き倒すと肩に足を掛けて無意気に捻り上げた。肘の後ろに膝を当て、本来曲がるはずのない方向に腕を倒す。裕紀の手はいとも簡単に自身の背中を叩いた。

——ばかな、そんな簡単に。

浩己は一賀に掴みかかった。

ひょいと一賀が身をかわすと、あらぬ方向に曲げられた裕紀の腕がぱたりと身体の上に落ち込んだ。

——肩も外れてるのか。

浩己は一賀を気にしながら裕紀の傍にしゃがみ込んだ。

「大丈夫か？」

「……あ……あ……」

裕紀の口からは苦痛の呻きが漏れる。

裕紀自身も何が起こったのが解っていないに違いなかった。本当に一瞬のうちに一賀は彼の片腕を潰して見せたのだった。

様子を見る以前の問題だ。最初から全力でいかなければ何をされるか判らない。——裕紀だつて充分警戒はしていたのに。

——あいつ、最初から俺たちを壊すつもりだ。

裕紀の声が浩己の頭の中に響いた。

彼ら双子は普通の人にはない能力を持っていた。口に出さなくても互いの声を聞くことができるのだ。

——絶対捕まるな。

裕紀は言った。

浩己は、腕を背中の方へ捻曲げられたまま俯せに倒された裕紀の身体をそつと仰向けにしてやった。どこが痛むのかはそれこそ痛いくらいに判っている。浩己はじんわりと伝わってくる苦痛に眉を寄せた。

「あんた、よくもやってくれたな」

浩己は腕をさすりながら立ち上がった。

「そつちが仕掛けてきたんだらう」

ごほんごほん一賀が咳き込む。呼吸の回数もかなり多くなっている。——どこが悪いのか？浩己は首を傾げた。顔色もずいぶん悪いようだし、呼吸も苦しげで、時折不規則に息を詰まらせている。

「頭の悪い連中には身体に教えてやるのさ。二度と俺に手を出そうなんて気を起こさないようにな」

一賀は自分の体調の不良もお構いなしで、手近に転がる暴走族を蹴り付けた。「ぐう」という呻き声だけが上がる。そいつらもどこかしら身体を痛められているのだらう、蹴られてももう反撃するつもりもないらなかった。

肩で息をする一賀はにこりと笑顔を作るとそれを浩己の方へ向けた。——綺麗な顔。

浩己は僅かに躊躇ったが、裕紀を傷付けられた、その礼だけはしておかなければならない——きつ、と睨み返して拳を握った。

大腿で間合いを詰めて殴り掛かる。

その腕を掴もうとする一賀の手を避けてもう一発腹を狙う。

一賀は避けようともせず、今度こそその腕を捕まえた。

——同じようにはいくかよ。

浩己は掴まれた腕を引き寄せて一賀の腹に膝を入れた。

浩己より頭一つ分ほど小柄な一賀の身体が、彼の腕の中に飛び込んできた。

息が荒い。

額にはうっすらと汗をかいている。

一賀は浩己の腕に身体を預けたまま休んでいるようだった。

軽い体重——。浩己は一賀の身体を支えるように持ち上げた。

——浩己！

裕紀の声が頭に響くのと同時に、彼は一賀を突き飛ばして後ろへ飛び退いた。

こめかみに痛みが残る。

一賀の爪がそこを掠めたのだ。

つうつと温かいものが頬を伝う。あの体勢から顔面に掴みかかるなんて——。浩己は手の甲で頬を拭った。

一賀は片手で腹を押さえ、もう片手で胸を押さえて俯いていた。

今の膝蹴りは効いているはずだ——。

——あんな身体でよくここまでやれるものだ。もう立っているのもきついはずだろうに。

それでも一賀は息を抑えて顔を上げた。

ゆらりと浩己の方へ足を踏み出す。おぼつかない足取りの一賀は、

こつりと躓いて浩己の方へ踉蹌めいた。

そのまま浩己に掴みかかる。

浩己はその細い両手を受け止めた。

いくら何でも正面から組み合って力負けすることはないだろう。

浩己は組み合ったまま一賀の身体を引き寄せた。

軽い身体は易々と引き寄せられて彼の懐に入ってきた。が、今度は

一賀の膝が浩己の腹に食い込む番だった。

打ってくるとは考えられない不安定な体勢からの重い一撃だった。

手を離して離れようとする浩己の腕を掴み直してぐいと引く。

前のめりになった浩己の後頭部に両拳を揃えて叩き込み、倒れる寸前に喉元を蹴り上げる。

「浩己！」

裕紀は痛みを堪えて身を起こした。

浩己はがくと膝をついて仰向けにひっくり返った。

頭部を激しく揺さぶられて完全に脳震盪を起こしている。

裕紀は、浩己の意識がなくなったのを感じて立ち上がった。

「お前、腕一本じゃあ懲りないのか」

一賀は裕紀の方へ目を向けたまま、気を失っている浩己の腕を掴んで身体を引き起こし、肘の辺りを蹴り付けた。鈍い音がして腕がおかしな方向に曲がる。

「止せっ」

一賀が浩己のもう片方の腕を取るのを見て、裕紀は声を上げた。

——両腕、潰す気か、なんて奴だ。

裕紀は腕を押さえて一賀に蹴り掛かった。

——浩己っ、起きろっ。

浩己の頭に意識を叩き付ける。

「……う……」

浩己は腕の痛みで意識を取り戻した。

「裕紀……」

視界にがくと膝を折る裕紀の姿が入ってくる。

その肩に一賀が手を掛けている。

浩己は立ち上がって一賀に身体ごと飛び掛かっていった。

「お前もか」

一賀はちっと舌打ちした。辛うじて浩己の体当たりを避けたものの、バランスを崩してべたんとして座り込む。彼は地面に両手をついてせいぜいと息を吐いた。

彼にしてみれば二人の抵抗は予想外のものだった。

大抵の奴なら腕の一本も折ってやれば戦意喪失して手向かいしなくなるばかりか、二度と彼に手を出そうとはしなくなる。手加減して、五体満足で帰してやっても、バカな連中は何度でもやってくるのだ。だから、いつも自分たちのバカさ加減を充分思い知る程度に痛めつけてやった。

白磁でできたような外国人の双子の身体は、ナリこそ変わってはいたが、他の者と同じだった。肩も外れるし、骨も折れる。しかし、二人は他の者と違って腕をへし折ってもまだ抵抗をやめなかった。

一賀は裕紀と浩己を見比べて、取りあえず手近にいる裕紀の方に狙いを定めた。よろよろと立ち上がると、胃の辺りを下から蹴り上げる。

つんのめる裕紀の身体にもう一発強烈な蹴りを見舞う。

一賀は容赦しなかった。気管支の攣縮による呼吸困難で、息も絶え絶えの彼には最初から手加減などしている余裕などなかったのだ。

一賀は、仰向けに倒れる裕紀の頭の後ろに最後の一撃を加えた。

しかし、その蹴りは、もう裕紀の意識を完全に奪うだけの力を失っていた。裕紀は意識を失うことなく込み上げる吐き気に呻いた。

一賀は、ふらふらと浩己の方に向き直った。

——あいつ、まだやる気か。浩己はぎりっと歯を噛み締めた。口に中に血の味が広がる。

一賀が彼の方へ近付いてくるのを見て浩己は立ち上がった。

激しい眩暈と吐き気に襲われる。

このまま倒れてしまいたい気分だった。

一賀はふらつきながら浩己の前まで来て、縋り付くように彼の学生服の胸元を掴んだ。

「ごほごほと咳き込んで浩己の胸に頭をつける。

一賀はそのまま崩れるように膝をついた。

引っ張られて浩己も膝を折った。

——さすがに限界か？

一賀の手が襟元から離れる。呼吸の様子から言って彼には肺か気管支——呼吸器系に障害があるに違いなかった。彼には限界があったのだ。——病人にしちゃあ、やりすぎだぜ。浩己は一賀の背に手を回した。

——浩己、そいつから離れろ。

裕紀の声が頭に響く。

彼らの鋭敏な感覚は一賀の殺気が途絶えてないのを感じていた。

しかし、——もう俺たちには手の出しようがない。こんな身体に傷を付けることなんてできはしない。浩己は一賀の顔を見下ろした。

「お前、綺麗な目をしてるな」

最強最悪と呼ばれる少年はぎりぎりの力で腕を上げた。人差し指が

浩己のうす茶色の瞳に触れる。指先がしっかりと眼球を撫でた。

身体に傷を付けることはできない——だが、一生残る傷を——。

浩己は覚悟を決めて一賀に顔を近付けた。

「あんたにくれてやってもいい。ただし勝ち俺たちがもらう」

一賀はにこっと笑って目を閉じた。

交渉の通じる相手とは思わなかった。目玉のつくくらい潰したところでのその胸には傷も残らないのかもしれない。しかし、

「勝ち譲らないよ」

彼は浩己に何の反撃も許さないままひっそりと呼吸を止めた。

——負い目を負わされることになったのは彼らの方だった。

「日栄、死に損なっちゃってなあ」

病院から百メートルほど離れたコンビニエンスストアで、バジヤマの彼——日栄一賀は、数人の男たちに取り囲まれた。

学生服だが校章も名札も付けてはいない。見たところ高校生のようだった。

一賀は知らん顔で男たちの間をすり抜けた。

彼は二日ほど前に喘息の発作による呼吸困難から心停止を起こして入院していた。すぐに蘇生したので大事には至らなかったが、本来ならまだ、病室で安静にしていなければならぬはずだった。

「二高の奴ら、お前の息の根止められなかったって悔しがってたぜ」
男たちはレジで金を払う一賀の後ろにぞろぞろと付いて回った。

「目障りだ。俺に近付くな」

一賀は振り返りもせずそう言い放つと店を出た。

「可愛い顔して言うじゃねえか。今夜限りでその顔ともお別れかと思おうと寂しいなあ」

店の外にはいつの間にも集まったのか、十台ほどのバイクと数台の車、十数人の男たちがたむろしていた。

一台の車の後部座席のドアが開いている。

乗れということらしかった。

——この前死んでた方が綺麗な死に方だったのに。

一賀は思った。今の体調ではここにいる全員を叩きのめすまで身体が保たないかもしれない。——せっかくな綺麗な生んでもらったのに申し訳ないなあ。

「楽には逝かせないから覚悟しておけ」

リーダー格の男はポケットから煙草を取り出しながら、ちらりと目

で合図を送った。

若い——おそらく中学生の小僧だろうが、二人が、びくびくしながら一賀の両腕に取り付いた。

一賀の身体に触れた者はこれまで一人の例外なく次の瞬間には病院送りにされている。「最強最悪」——その悪名は校区を跨いで近隣の不良たちの間には知れ渡っていた。まだ顔に幼さの残る暴走族予備軍の二人は、一賀の腕を取ると抵抗されないよう身体全体でしがみついた。

「やけに大人しいじゃないか、お前らしくもない」

男は煙草に火を付けると勢いよく吸い込み、ふうーと煙を一賀に吹きかけた。

「鬱陶しい。離れろ」

一賀が露骨にイヤな顔をして両脇の二人を睨み付けると、二人はびりあがつてがたがたと震えた。それでも恐らく死んでも放すなど言われているのだろう、一賀の腕を放そうとはしない。

へっへっへ、と男は馬鹿にしたように笑った。

「日栄、お前も終いだな。こんなガキ共にも言うこと聞かせられねえたあな」

男が手を振ると二人は一賀を引きずるようにして車へ連れ込んだ。

——ホントだ。昨日まで中学生で俺に近付こうとする奴なんかいもなかったのに。

彼の相手になるのは大抵高校生だった。高校生でも一人や二人で彼に向かってくる者などいなくなっていた。

狭い後部座席に三人が収まると、車やバイクのエンジンが一斉に始動された。消音器を切つてあるらしく耳を劈くような爆音が夜の住宅街に響き渡る。

車高を落とした車は、飛び跳ねるようにコンビニエンスストアの駐車場を後にした。

★

★

車は、山手にある運動公園の競技場の駐車場で止まった。

男たちは一賀を車から引きずり出すと、競技場に連れ込んだ。

「お前がいなくなりやあ、一高龍騎兵も戦力半減だ。俺たち曼陀羅が後は仕切らせてもらうぜ」

一賀をサッカーグラウンド脇のベンチに座らせた男たちは、手に手に鉄パイプやら金属バットやらを持って周囲を取り囲んだ。

この近在には公立の高校が三つある。暴走族グループもその縄張りも、その校区に合わせて三つに分かれていた。市の中心部にある第一高校の龍騎兵、海手にある第二高校の躍る人形、山手にある第三高校の曼陀羅の三つである。

三つの勢力はほぼ均衡していたが、日栄一賀をその校区内に抱える龍騎兵が若干突出していると言えた。一賀自身はどの勢力にも属していないつもりだったが、その縄張りの関係上、龍騎兵だけが彼を擁護していた。

「ここいらでお前に病院送りにされた奴が何十人いると思うよ」

一賀はベンチにもたれ掛かって目を細めた。

——バカの数なんか知るものか。

「そいつらの分、きつちりその身体に返してやる。全部返し終わるまではくたばるんじゃねえぞ」

男は残忍な笑みを浮かべた。

日栄一賀の最強伝説はすでに崩れ去っていた。彼の強さが身体を庇つてのものであったのだということは今や皆の知るところとなった。

長引く乱闘には耐えられない上、打たれ弱い。

二高躍る人形が壊滅と引き替えに明らかにした事実だ。

男は若い連中に顎をしゃくった。

金属バットを持った目つきの悪いのが、脚を引きずりながら一賀の前に進み出る。

「日栄、俺あお前に鞆切られて今でもこの様だ。借りは返させてもらうぜ」

男はバットを肩に担いでとんとんと弾ませた。

「懲りないんだな」

一賀がせせら笑う。

男はバットを一賀の腹目掛けて振り下ろした。

死に損ないが。思い知らせてやる。

が——。

二日前、一度は死んでいたはずのバジヤマ姿の華奢な少年は、男が怒りにまかせて振り下ろしたそのバットを易々と受け止めた。

そればかりではない。そのバットを引いて男を引き寄せると喉に掴みかかった。

爪が皮膚を裂き喉に食い込む。

血が一賀の白い手首を伝った。

「……ひっ……あ……助けて……」

——殺される——。男の目に涙が浮かぶ。

他の者も思わず息を呑んだ。

彼らとて一賀を生かしておかないつもりではあった。しかし、本当にそんなに簡単に人の命を奪えるものだろうか。彼らとて死には——それが他人の死でも——恐怖を抱いているのだ。決して気分のいいものではあり得ないからだ。

それを日栄一賀は——。

「最強最悪」——一賀がそう呼ばれ続けた理由を彼ら一同は再認識したのだった。

「てめえ!!」

目の前にいた男が二人、金属バットで一賀に殴りかかる。

両手の塞がっている一賀の頭上に二本のバットが襲いかかった。
がつ。

目を瞑って凶器を振り下ろした男たちは、確かな手応えに恐る恐る
目を開けた。

黒い腕の影に白いものが見える。
？

二人の男が振り下ろした金属バットは、学生服を着た銀髪の双子に
よって受け止められていた。二人とも左腕を三角巾で吊している。

「あなた、何やってんだ」

双子の片方、相原裕紀は男を蹴り飛ばし、一賀の手を掴んだ。

「病院抜け出すなんて、俺たちに恨みでもあるのか」

もう一人の浩己も男に蹴りを入れて一賀を振り返った。

一賀はきよんとした顔で見覚えのある二人を見上げた。

二日前彼の息を止めた外国人の双子。

「お前たち、よくここが分かったな」

「探したに決まってるだろ」

裕紀は一賀の手から男を引き剥がし、血塗れの手を三角巾で拭いて
やった。

「何だ、お前たち」

曼陀羅の面々は、日本人ではない二人の登場に面食らったものの、
二人が日本語を話しているのを聞くと気を取り直して凄んで見せた。

「一高か？」

「一中の相原だ。この喧嘩、俺たちが肩代わりする」

裕紀は一賀の手からバットも取り上げて投げ捨てた。

「一中だと？」

「中学……生……か」

男たちの間からどよめきが起こる。百七十センチはあろうかという
外国人の双子はとても中学生には見えなかった。だが、身体は大きく

ても、華奢で、モデルか何かのように綺麗な顔立ちで、二人とも片腕
を骨折しているらしくギブスを入れていた。

「その怪我はどうした、日栄にやられたのか？——ははん。そうか。
お前たちか、一昨日そいつの息の根を止めたのは」

男たちは二高の学生から、その噂を聞いていた。

「うるさい」

浩己は男たちに背中を向けたまま一賀の肩を掴んでベンチに座らせ
た。

「あなたはここで大人しくしてろ」

——命の消えていく感触がどんなに気持ちの悪いものか——。

微弱ながらも精神感応力を持っている彼らにとつて、それはもう二
度と味わいたくないものだった。

「この日栄一賀に関わる喧嘩は、今後一切俺たちが請け負う」

二人は一賀の両脇に仁王立ちになった。

「バカか？」

一賀がぼつりと呟く。

「あなたにも言っておく。二度と俺たちの前で息を止めるような真
似はするな」

浩己の言葉に一賀は肩を竦めた。

——昨日今日会ったばかりの奴に何で俺がそこまで言われなきゃい
けない。他人のことなど放っておけばいいだろう。

「物好きなクソガキ共だ。この辺りでそいつに恨みを持っている
奴がどのくらいいると思ってるやがる」

「痛い目見るだけじゃ済まねえぞ」

男たちは口々に言うのと得物を振り上げ輪を縮めた。

相手が二人増えたとはいえ、片手ずつの怪我人だ。日栄一賀を倒し
たとは聞いているが、それは奴が踊る人形と一戦やらかした後で、喘
息の発作を起こしているときだ。数では圧倒的にこちらが有利——。

怖るるに足らず。

男たちは近い者から一斉に二人に襲いかかった。

二人は一賀を庇って、その角材やら鉄パイプやらを受け止めると、全く同じ動作で手前の男たちを蹴り飛ばした。

跳ね飛ばされた男たちが後ろの連中を薙ぎ倒す。

三人を囲む輪は一気に広げられた。

裕紀と浩己は囲みを外へ外へと崩していった。

大乱闘が始まる。

一賀は二人の動きを目で追った。

薄暗い中で二人の銀髪はよく目立つ。二人同時に追うのもさして難しくはなかった。

息のあった二人の動きには無駄がない。彼らは一人一人別々に戦っているようでいて、必ず互いがフォローし合っていた。多勢に無勢と高を括っていた連中は、自分たちの方が一対二でいたがられているように感じていることだろう。二人は決して一人で一人を相手にすることがなかった。目の前いる相手に蹴りを入れたついでに相手の背後を狙う男の足を払う。立ち上がりかけた男の身体の上にもう一方が別の男を放り投げる。

浩己の前に立ちはだかった男に裕紀が背中から蹴りを喰らわずと、浩己は身を屈めてすっ飛んできた男をすくい上げ後ろへ投げ飛ばす。そこには鉄パイプを構えた男が立っていて、あえなく投げ飛ばされた男の下敷きになる。

翻弄される男たちの様子は見ていて滑稽なほどだった。

だが。

「手加減ばかりしてるといつまでたっても終わらないだろ」

一賀は二人に声を掛けた。——全く頭が悪い。

二人は確かに強いかもしれない。しかし、まだ、一人として逃げ出す者も倒れたままになっている者もない。これではいつまでたつて

も勢力差は変わらないではないか。

一賀はゆらりと立ち上がった。

一番近くにいた男が「ひいっ」と悲鳴を上げて後ずさる。

浩己はそちらへ目をやった。

一賀が一步踏み出すだけで男たちはみな慌てて道を開けている。

死に損ないの半病人だという情報も、これまでの経験で身体に染み付いた恐怖を払拭しきれないでいるのだ。反射的に逃げ腰になる。

「バカ野郎。そいつからやっちまえ」

リーダー格の男に叱咤されてようやく我に返る。

「くたばりやがれっ」

一賀の周りにいた男たちは三人ほどでめくばせし合うと一斉に一賀に襲いかかった。

「やめろっ」

裕紀と浩己は辛うじてそのうちの二人を「助ける」ことができた。

一人に足払いをかけもう一人を殴り倒す。

あとの一人は間に合わなかった。

犠牲者は、一瞬の内に片方の手の指を全部折られ、肘と肩の関節を外されて、日栄一賀の足元でのたうち回った。

「…ひ…さかえ…」

裕紀と浩己は潮が引くように男たちの戦意が喪失するのを感じた。

一同の動きが止まる。

男たちの半数以上は日栄一賀によって病院送りにされた経験を持っていた。

男たちの恐怖が裕紀と浩己の意識を締め付ける。痛みの記憶が身体を軋ませる。

二人はちっと舌打ちした。

動きの止まった連中を突き飛ばし、リーダー格の男の胸ぐらを掴む。

「あんたが頭だな。ここにいる全員、また病院送りにされたいか？」
裕紀は片手で男の身体を吊り上げた。

男の頭の中に様々な思考が回転する。

「わ……かった。引き上げる」

男は憎々しげに吐き捨てた。

日栄一賀は病み上がりにもかかわらず、全く力を落としていない。体力がないことは知れたが、この双子の加勢があつたのではこちらの方が不利だ。——そのうち一人ずつにして潰してやる。

男は指図して重傷を負つた男を助け起こさせると、

「引き上げだ」

と手を振った。

もうすっかり戦意を喪失していた連中は、凶器を拾い上げ、やられた仲間を庇いながら競技場を出ていった。

「……このままでは済まされぬぞ」

全員が引き上げると、リーダー格の男は最後に、

「日栄、このクソガキ、てめえだけはどんな手段を使つても、必ず息の根止めてやる」

と、捨て台詞を残した。

どんな手段を使つても——と言う言葉と同時に男の頭の中によぎつたイメージに裕紀と浩己は眉を顰めた。

「最悪」と言われる人間への報復としては妥当なものなのか——二人は顔を見合わせて溜息を吐いた。——守りきれぬか？俺たちで。

「あんた。大人しくしてろと言つたはずだ」

浩己は言つても無駄だとは思ひながら小柄な先輩を見下ろした。この人が言うことを聞かないのであれば、到底守ることはできない。

「少しは自分の身体のこと考えろよ」

裕紀も同じ気持ちで言葉をかけた。——身体のことを考えているからあんなやり方しかできないのだからうけど、それならまず喧嘩の売り

買いを止めることだ。

一賀はぼつちりとした瞳で二人を見上げた。

「お前、名前は？」

手を差し伸べて浩己の頬に触れる。

「相原、浩己」

一賀はにこつと笑つて人差し指を浩己の左目に滑り込ませた。

「お前、俺が他人の痛みを感じる人間だと思つたのか？」

浩己は目を見開いたまま笑い返した。

「感じなくていいさ。嫌なもんだよ」

一賀の指が眼球を撫でると裕紀がぶるつと身を震わせた。

「お前たち」

一賀はくるくると指先を回しながら、

「俺の代わりにするつもりなら手加減なんてしてらんじゃないよ」と眉を顰めた。

爪が角膜を圧迫する。

「見苦しい」

一賀はそのままの体勢で浩己の鳩尾を蹴り上げた。

「……あ」

裕紀が声を立てる。

浩己はがくりと膝をついた。

一賀の指が眼窩に深く差し込まれる。

片目はとうに捨てている。そんなものは痛まなかった。

「浩己、止めとけよ」

裕紀は一賀の手首を掴んで浩己から引き離した。——見てる方が痛い。

「あんたもだ、日栄さん。俺たちのやり方が見てて苦しかったのなら、改めるから」

裕紀は一賀の濡れた指先を自分の胸元へ引き寄せた。——できるも

のなら俺たちの痛みを味合わせてやりたいよ。

「お前は？」

「相原裕紀。宜しく、先輩」

一賀は笑顔を向ける後輩の腹を思いつき蹴り付けた。

裕紀は躊躇けはしたものの倒れはしなかった。

——こんな甘い連中に庇われるいわれはない。

一賀は裕紀の学生服の胸元を掴み直して引き寄せた。

折れていない方の腕を取る。

裕紀は奥歯を噛み締めた。

「バカか、お前」

一賀は腕を引いて身体を押しつけて裕紀を仰向けに押し倒した。

頭に手を掛ける。

裕紀も、浩己も手向かいしなかった。

「両腕使えなくなってもいいのか」

「身体が痛むのなんか慣れてるさ。腕でも眼球でもくれてやる」

裕紀は笑った。

一賀は腰を浮かせて裕紀の腹に膝を落とした。

「俺に関わっていると命落とすぞ」

「あんたの命を拾ったのは俺たちだ。二度と勝手に捨てられてたまるか」

浩己が顔を上げる。

一賀はものも言わずに浩己を殴り付けた。

——「龍騎兵」でさえ、俺を護ろうとはしないのに。

「それに……俺たちに痛む傷を付けたのはあんたの方だ……」

裕紀は腹を押さえて身を起こした。

一賀はその頭に手を掛け後頭部を地面に叩き付けた。

——こいつら、何で。

ぜい、と喉が鳴る。

一賀は裕紀の身体に手をついて咳き込んだ。

「日栄さん」

浩己は跳び起きて一賀に駆け寄った。

——無茶だ。二日前に心停止を起こしたばかりなのに。

同じ人間にそう何度も死なれてたまるか。

「ごめん、大人しくしてくれ」

浩己は腕を振り上げた。

首筋を狙って。——眠っててもらう。

一賀はゆっくりと浩己の方へ顔を向けた。

彼を見上げてにっこり微笑む。

——いけない。スピードが、鈍る。

浩己は無駄とは知りつつ目を閉じた。

「甘いよ、浩己」

腕が空を切る。

声と同時に一賀の拳が鳩尾に叩き込まれた。

——力のない、拳——。

恐る恐る目を開ける浩己の腕に一賀の小さな身体が倒れ込んでく

る。嫌になるくらい軽い。——「最強」と呼ばれる力が彼の重みだっ

たのに。「最悪」と呼ばれることが彼の強さだったのに。——この身

体じゃもう無理だ。

浩己は一賀を抱き上げた。

「弱い奴は……いらない」

彼の腕の中で最強の少年は目を閉じた。

——弱い、か。なら、なってやろうじゃないか、強く——。

裕紀が身体を起して浩己を見上げる。じんわりと痛みが伝わった。

「俺たち」

「甘い」

双子は顔を見合わせて溜息を吐いた。

成瀬薫VS緒方竜

「なあ、あんたと今の会長、ほんまはどつちが『最強』なんや？」
緒方竜は生クリームの方かんだココアを嚙りながら、カウンターの
中でコーヒーを淹れている成瀬薫に声を掛けた。

高校を卒業し、大学に通っている薫と彩子——内藤彩子は、授業の
ない時はよくここ——不知火羅牙の母親の茶店で手伝いをしていた。

「何だよ、竜、まだそんなこと言ってるのか」

薫は高校在学中、この喧嘩っ早い後輩に何度か勝負を挑まれたもの
だったが、その度に何やかんやと理由を付けて結局そのまま卒業した
のだった。

「なあ」

竜は強請るような目で薫を見上げた。

「一賀に決まってるだろ。あいつがこの辺りじゃ『最強』って呼ば
れてたんだ」

呼び名なんかどうでもええ。——竜は思った。確かにこの辺りで「最
強」と呼ばれていたのは日栄一賀だった。「最悪」という形容詞のお
まけ付きで。しかし、彼がこっちへ転校してきたとき、その日栄一賀
もすでになりをひそめて一般の学生の中に埋没してしまっていた。——
そうさせた人は誰や。竜が疑問を抱くのはそこだった。

「なあ、あの性悪が何で大人しゅうしとるんや」

一賀が「最悪」と呼ばれたのにはそれなりの理由がある。そんな奴
が何故大人しく「お茶会同好会」なんていう茶飲み友達グループの会
長なんかにならまっているのか。

「そりゃあ環女史の人徳さ」

薫は笑った。環女史——現お茶会同好会副会長。
「惚けんなや」

「惚けてなんかないさ」

「あんた、あん人とやりおうたこともないらしいなあ」

薫は、お茶会同好会に入ってから近隣の奴らを締め上げて、解
散してしまった「龍騎兵」——特に最後の総長、成瀬薫とナンバー2
日栄一賀について調べて回っていた。

「ああ、ああいう奴には近付かないに限るからな」

薫は薫に解るように口を尖らせて眉を顰めて見せた。

「あんた、負けるのがそんなに怖いんか」

「負けるのは一向に構わないさ。結果の判ってる勝負はする必要が
ないだろ？」

薫は渋い顔のままココアを嚙った。

「勝負なんて、やってみな判らへんやろ」

「判るよ」

薫は成瀬薫のこういうのらりくらりしたところが気に入らなかつ
た。他のメンバーの手前、先輩として立ててはいたが、薫の幼なじみ
の女たちならともかく、あの日栄一賀までが大人しく彼に従っている
のがどうしても解せなかった。

「あんたほんまに臍抜けやな」

「ああ、臍抜けだよ」

薫がいくら挑発しても薫がそれにのった例しはない。その点では薫
の忍耐強さは驚異的だった。

「なあ、何でや？」

薫はカウンターに肘をついて上目遣いに薫を見上げた。

「いいじゃないか。一賀に無理させなきゃ、お前に敵う奴はいない
んだ。それでさ」

薫は薫の目の前にアップルパイの皿を置いて、「ああ——羅牙と美希
ちゃんとは別だぞ」と、付け加えた。

「いやーや。あんたらを知つとる奴らの誰がそないに思うねん。

俺はええ笑い者になるだけやないか」

竜は皿を引いて、フォークを銜えた。

彼が甘党なのを知っている薫は、いつも頼まれもしないうちからケ―キを出してやっていた。

「そんなことないって。俺は臆病者で通ってるんだから」

薫は自分で淹れたコーヒーを注いで口に運んだ。

「その臆病者が龍騎兵を壊滅に追い込んだんか？」

「人聞きの悪いこと言うなよ。龍騎兵は解散したんだ」

竜は膨れっ面でアツブルパイにかじりついた。

一高龍騎兵には総長の代替わりの時に、次期総長候補者を卒業生が私刑にかけるといふ伝統があった。噂では、それまで大して目立った存在ではなかった成瀬薫が次期総長に指名されて、私刑にかけられた際、先輩を全員叩きのめしたただけではなく、当時最大の勢力を誇っていた龍騎兵に解散止むなしの損害を与えたということになっていった。当時一年生だった今の三年生たちに聞いたとしても、薫と、一賀を怖れて詳しいことを教えようとはしないので、彼らが薫に何をしたのかは判らなかつた。

「本気になるんが何でそないに難しいんや」

パイで口を一杯にしたまま竜は呟いた。

★

★

「日栄さんと成瀬さんですか？」

緒方竜に図書館の視聴覚室に呼び出された相原裕紀と相原浩己は、彼の質問にちよいと首を傾げて、

「成瀬さんでしょ」

と答えた。

「何でや？何でそう思う？」

日栄一賀との方が付き合ひの古い二人が意外な答えを返したので、竜は眉を顰めた。二人は成瀬薫が卒業してから入ってきた一年生だ。中学が同じだった一賀のことはともかく、薫のことを何故そんなふうで評価できるのか。一年間付き合つた竜でさえ薫の実力については評価しかねているというのに。

双子は、そっくりな顔を見合せて、

「一つにはあの日栄さんが大人しく連んでるから」

と、彼らにしたらもつともな理由を挙げた。

「緒方さんだってあの人の気性は知ってるでしょ」

付け加えられたとおり、確かに元の日栄一賀なら薫のようなもめ事嫌いの日和見主義者など相手にもしないだろう。

「ふん、で？」

でも、一賀は機嫌良く薫と付き合っていた。何故か。

「で、もう一つには成瀬さん自身がそう思ってるから」

銀狐とあだ名される双子が日栄一賀より成瀬薫の方が上だと評価するもう一つの理由は、その評価と同様意外なものだった。竜は、ぽかんと口を開けてポーズをとると、すぐ渋い顔に作り替えた。

「何：やと。ほなあいつ、口ではあないなことばっか言うというて、腹ん中じゃ自分の方が上や思うとつたということかいな」

「まあ、そう言っても間違いじゃありませんけど」

「でもたぶん、『本気でやれば』、日栄さんの体調を抜きにしても成瀬さんの方が上手だと思えますよ」

浩己は「本気でやれば」、というところを力を入れて言った。

「ただあの人を本気にさせるのはまず無理だと思えますけど」

裕紀が肩を竦めた。

それは竜が一番よく知っている。どんなに挑発しても成瀬薫の態度は変わらない。竜と一賀の勝負を止めるために間に割って入って、竜を吹っ飛ばすほどの蹴りを喰らわせたときでさえ全く本気ではなかつた。

た。

だからこそ、成瀬薫の本気が見てみたいのだ。

「日栄一賀と——もう一戦やらかしたらどうや？」

後輩に、伺いを立てるように、ゆっくりと竜は訊いた。

「だめです。それは俺たちがさせません」

案の定二人はすぐに首を横に振った。

「緒方さんとじゃああの人が保たない。成瀬さんが来る前に俺たちが止めますよ」

過去、唯一、日栄一賀を心停止にまで追い込んだという二人は、中学時代から日栄一賀に付き従って、彼に仕掛けられた喧嘩を片っ端から片付けてきた。

「過保護やなあ」

竜は溜息をこぼした。

「緒方さんは何でそんなにこだわるんです」

二人してみれば、全くその気のない薫と、ようやく大人しくなってくれた一賀の実力の優劣など、興味のない問題だった。

「俺はなあ、やってもみんうちから結果を決めつけられるのが嫌な
んや」

「でも」

と、言いかけてから浩己は口を閉ざした。

「でも何や」

しまった、というような表情の浩己を竜が睨み付ける。

浩己は怒鳴られるのを覚悟で言葉を続けた。

「緒方さんだってもう判ってるんでしょ、結果は」

「銀狐——」

竜は浩己の胸ぐらを掴んで引き寄せた。

「人の頭ん中、覗くんやないで」

銀狐——裕紀と浩己は精神感應力者だった。言葉の形にして伝え合

うことができるのは互いの思考のみだったが、しかし、共感と呼ばれるその力は人の心の動きを敏感に感じていた。

「緒方さん」

裕紀はやんわりと竜の腕を押さえた。

「あの人、ここに傷があるんですよ」

と、溜息混じりに自分の胸を指差して見せる。

竜は怪訝な顔で浩己を放してやった。

「何や、心臓でも悪いんかいな」

日栄一賀が喘息持ちだというのは有名な話だが、成瀬薫の身体が悪
いなんて言う話は聞いたこともない。

「そうじゃなくて」

と、双子はまた顔を見合わせた。

「俺たちじゃあ詳しいことは解りませんが、あの人、昔、何かあつ
たんでしょう？傷があるんですよ、ここにね」

もう一度とんとんと胸を叩く。

傷——精神的な、か。

——鬱陶しいやつちゃで、ほんま。成瀬薫も銀狐も。

「昔、何があつたんや？」

諦め半分に竜は訊いてみた。

二人は同じ様な仕草で首を竦めた。

「俺たちは知りませんよ。知っているとすれば、彩子さんくらいじ
やないですか」

内藤彩子——か。

はああ、と、竜は溜息を吐き出した。

★

★

閉店間際に佐々克紀は現れた。

「こんばんは。成瀬先輩」

克紀は愛想良く笑ってカウンター席に腰を下ろした。彼がここへ来ることは珍しくはない。お茶会同好会のメンバーではなかったが、妹の少を連れてよく出入りしていた。

「よう、今日は一人か」

薫もいつものように愛想良く対応した。

克紀はくすりと笑って、

「相変わらずですね。この間のことはお咎めなですか」

と、視線をカウンターの上の自分の手首に落とした。

薫は自然とその視線を追った。

克紀が袖口を少し引き上げると、銀色の細身の時計が姿を現す。

女物の——時計。

「咎め立てしたところでお前が聞くとも思えん」

「——何事も、やってみなけりや判らないでしょ」

克紀はゆっくりと腕を上げながら、視線を上げた。

薫の視線が腕の動きについて上がってくる。

二人の視線が合う。

「——緒方先輩、また随分ストレスを溜め込んでましたよ」

克紀はにこっと笑って頬杖をついた。

「お前……」

薫は克紀の笑顔から目が離せなくなっていることに気がついた。

「あいつにまた何か仕掛けたのか……」

佐々克紀が催眠暗示を使うことを知っていたはずなのに、まんまと引っかけた。竜はもつともつと単純だからなあ。薫は自由にならな

い身体を動かさそうとすることはさっさと諦めた。

「あの人には仕掛けるまでもありませんよ」

「あなたは言葉が区切った」

——暗示、か。

薫は眉を蹙めた。胸が痛む。しかし——軽い。

「俺は筋金入りの腰抜けだからな。お前ごときに唆されたからっておいそれとは本気になつたりしないよ」

「その性格は直した方がいいんじゃないですか」

克紀は頬杖を外して腕をカウンターにおいた。

「ブラックを」

時計がこつりと音を立てる。——引っ掻いたくらいの暗示じゃあだめか。楽しませてはくれないなあ。

克紀は薫が彼の好みに合わせて淹れた濃いめのコーヒーに口を付けた。

★

★

「緒方くん」

校門を出たところで竜は呼び止められた。

「彩子はん」

いつからそこで待っていたのか、校門の脇で内藤彩子が立っていた。

——わざわざ向こうから出向いて来るやなんて、どういう風の吹き回しや。

彩子はすうっと手を伸ばして人差し指で竜の眉間をpushした。

「緒方くん、あたしたちを見るときにそうやって眉間に縦皺入れるのやめてくれないかしら」

「彩子はん……」

竜は彩子に押されて後ずさりすると額に手をやった。

——眉間に皺で、俺、そないに気にして……

「気に入らないんでしょ。薫ちゃんの日和見」

「彩子は幼なじみらしく遠慮のない言い回しで薫を評した。」

「その上八方美人で優柔不断ときとる」

と付け足した。

「よく解ってくれてるじゃない。なら、もう、勝負勝負って追い掛けるのは勘弁してもらえないかしら？」

「彩子は竜に目配せして歩き始めた。学校に隣接する公園に向かう。」

「竜は彩子について公園に入っていた。」

「薫ちゃんには全くやる気がないんだから、緒方くんの不戦勝よ」

薫の全くやる気がないっていうのは、弱い奴がしつぽを巻いて逃げ回っているというのとは違う。——俺にしてみりや、相手にもされへんかったちゅうこつちや。勘弁できるかいな。

「じゃあ」

と言つて彩子は振り返った。

「緒方くんの不戦敗というのはどう？」意地悪な問いかけだった。

「嫌や。それだけは絶対にありえへん」

竜は即座に言い返した。

「俺は今まで負ける思で、喧嘩したことなんかあらへん。勝負なんてやってみなわからへんやんか」

竜にはその言葉だけが頼りだった。成瀬薫は恐らく自分より強い。心の奥底では判っていた。しかし、それを認めるわけにはいかなかった。やってみなければ判らない。薫の強さを見たこともないのに。

「彩子はん、あん人、俺より強いんか」

あまりに真っ直ぐな瞳を向ける竜に、

「今はそうね、まだ薫ちゃんの方が強いでしょうね。でも、あの人はもう鈍っていく一方だから、すぐに緒方くんの方が強くなるわ」と彩子は笑って見せた。

「俺は、そんなん嫌や」

先のことなんかどうでもいい、今の、強い成瀬薫に勝てなくて意味がない。

「不戦敗は認められない？」

「当たり前や」

「じゃ」と言つて彩子は公園の中を先へと進んでいった。

「これで、認めてあげてもらえないかしら」

彩子が示したのは高さ二メートル以上はある庭園用の巨石だった。

「薫ちゃんの高校三年間でたった一度の本気の一発よ」

幅も厚みも一メートル以上はあろうかという巨大な石は縦にぱっくりと割れていた。中央部は石の表面が砕けて丸く凹んでいる。

「……んな、アホな」

竜はあんぐりと口を開けたまま立ちつくした。

モルタルの壁に大穴を開けたり、コンクリートブロックを割ったりくらのことは彼でもできる。しかし、相手は巨大な自然石だ。それを。

「こん……なん、ウソや。こんな……」

——化け者か……、あいつ——。

「緒方くん、構えなさい」

彩子は一言だけ声を掛けて、竜に打って掛かった。

「なっ、彩子はんっ、俺は——」

女とはやれない——そう言おうとしたが言えなかった。

彩子の拳がとっさに構えた竜の腕をかくぐって鳩尾に打ち込まれたからだ。重さは全くない。触れているだけで。しかし、——速い。竜には彩子の躍るような動きが追えなかった。

——アホな。この俺が——。

彩子の拳が身体に触れるのにそれを払うことがどうしてもできない。

「竜が十発以上喰らってから」

「薫ちゃんはあたしの数倍速いわよ」
最後に彩子の拳は竜の顔面で寸止めされた。

「こん……な」

竜はぎいっと歯を鳴らした。

内藤彩子がここまでできるなんて。

しかも。

「なんで、殴らへんのや」

手加減されていると考えただけでも竜は泣き出しそうだった。あれほどのスピードの打撃を全て寸止めするなんて。

「ごめんなさい。でも、あたしとしても、殴り返してこない相手を殴るわけにはいかないのよ」

彩子も竜が絶対に女を殴ったりしないことは承知していた。竜がその信条を通すというのなら、彼女にだって通したい信条はあった。

それに。

——目的のためには手段を選ばず。

いつだったかそう決めたのよ。

「こんで、不戦敗を認めえっちゆうわけか」

竜は恨めしそうな声を上げた。

「そうよ」——たとえ可愛い後輩を傷付けることになってもね。

——何でや。

女に手加減されて負けを認めさせられるくらいなら、薫に殴られて負けの方がいい。何故あの男は自分でやらない。竜は悔しくて仕方がなかった。身体に傷を負うことは辛くはない、だが、こんなふうにはブライドを傷付けられて黙ってはいられない。

「嫌や、俺、絶対」

「許さないわ、あたしが、絶対」

二人は暫く睨み合った。

「何でなんや……」

先に折れたのは竜の方だった。眉を八の字にして彩子から視線を逸らす。

「ごめんなさいね。悪いのはあたしたちの方だっていうのは解っているのよ。でも、普通の人は、一生殴り合いなんてしなくても暮らしていけるわけじゃない？あの人はやらないで済むことで痛い思いや苦しい思いをしたくないのよ」

彩子は困ったように曖昧な笑みを浮かべた。

——誰かてせんで済むならしとうはないわい。

「したら、一生そういうヤなもんから逃げ回っとくつもりなんか」

「できるものならね」

「痛うても苦しゆうても守らなならんもんかてあるやろ。俺はブライド捨ててまで楽しようとは思わへん」

「ブライドを捨てても守らなければならぬものもあるのよ」

彩子の口調は静かだった。竜を説得しようというような調子ではない。昔話を聞かせるように彩子は言った。

「緒方くん、守りたいものがいっぱいあっても、実際守れるものはごく僅かなの。薫ちゃんはね、自分の周りに波風を立てないことがな

るべく多くのものを守れる方法だと思っっているのよ。誰もが羅牙や美

希ちゃんのように強いわけじゃないの、解るわね」

竜は彩子の言葉をぎいっと噛み締めた。

ブライドを捨てても守らなければならぬもの——。

そんな大事なものなら、痛い思いをしたって苦しい思いをしたって、傷だらけになっても守らなければならぬのではないのか。

——ただ逃げ回っただけで、何でそいつを守れるっちゆうんか。

「そんなん、解らへん」

竜は彩子の言葉の意味するところには思い至らなかった。

「——緒方くん、裕紀くんと浩己くんを見てても解らない？」

「——緒方くん、裕紀くんと浩己くんを見てても解らない？」

彩子は心苦しそうに二人の名前を口にした。

「銀狐、か？何で——」

二人は彩子たちが卒業してから入ってきた新入生だ。彩子があの二人のどんな事情を、そもそも何故、知っているというのか。

「あの子たちは優しいから、もし、羅牙や美希ちゃんや日栄くんがいなかったら、もうここにはいないわ」

彩子は訳知り顔に言つて溜息を吐いた。

羅牙と美希。強さの喩え。

「そらどうゆう——」

言いかけて竜は漸く気が付いた。認めたくはないがあの人二人くらいでないと安心できないってことなのか。

「あの子たちの方がきついいとは思うけど、あの人も自分のことで周りの人間が傷付くのが怖いよ。守りきれなくて辛い思いをするくらいなら誰とも関わらない方がいい。あの子たちもよ。日栄くんのことはどうしても放っておけなかったみたいだけどね」

日栄一賀——あいつでさえ守られる側やゆうんか。

何故それほど、強くなければならないのか。誰だってそんなに強くはあり得ないだろう——。なのに何故、周りの人間の弱さにまで責任を持たなければならぬのか。

「——この辺りが不穏なのは今に始まったことじゃないのよ」
不穏。

「あの人は自分の見ていないところで誰かが傷付けられるくらいなら、自分は強くなくていいと思つたの。強くなければ周りの人間まで傷付けられることはないってね」

「——何が、あつたんや」

そうまでしなければならぬ何が。

「昔の話はやめておくけど、龍騎兵にしても、あの人に言うことを聞かせるのにあの人自身には一切手を出さなかつたのよ。——それが

どれほどのストレスだったか、解るでしょ」

それで、何もかもやめてしまったというのか。逆らうことも、戦うことも——。それで、錆だらけの鈍になつて忘れられるのを待っているというのか。

竜は胸の辺りがいらいらして身を震わせた。

そんなのは嫌だ。それでは、卑怯な連中の卑怯な手に屈したことになる。そんな負け方は我慢できない。

「——だからあたしは強くなつたの。あの人に守つて貰わなくてもいい程度にね」

「俺かて、そないな思ひはさせへん。弱いやなんて思わせへん」
竜は拳を握り締めた。

「なら、早く強くなることね。あの人がほんとの鈍になる前に」
彩子は強い口調で言つた。

「すぐや。すぐあいつより強うなつて見せたる。痛いとか苦しいとか言わせへん。羅牙にも美希はんにも俺の前には立たせへん。誰がどないに卑怯な手を使ったかて、俺は逃げへんし、諦めへん。流れ弾がどっち向いて飛んでこうが俺が全部盾なつた、全部や。何があつたつてどないな目えにおうたつて、俺は絶対諦めたりせえへん」

身体の傷などもとより気にならない。卑怯な奴らがどんなに汚い手を使つても、守ることを諦めたりするものか。

彩子にはこりと笑つた。

「緒方くんは強いわね。その言葉、薫ちゃんに聞かせてやりたいわ」
竜は彩子の笑顔から目を逸らした。

「嫌みなこと言いなや。今の俺ではあいつには勝てへんねやろ」
彩子は笑つて竜の頭を軽く撫でた。

緒方竜の初めての不戦敗は、こうして決定したのだった。

成瀬薰VS銀狐

「あんた、一高龍騎兵の成瀬薰だな」

単車に跨ってハンドルに脇をかけ、頬杖をついていた薰は、不意に声を掛けられて上体を起こした。

すぐ傍に銀髪の双子が立っている。

——近付かれたのに気付かなかった。

薰は少し驚いた。

「銀狐」——双子は確かそう呼ばれていた。

夏の終わり頃、西讃第一中学に転校してきた帰化ロシア人。転校早々の日栄一賀と二高躍る人形のいざこざに関わって、喘息の発作を起こしていた一賀を心停止に追い込んだという。

双子の片方は薄茶色の瞳を薰に向けて口を開いた。

「あんた、いつもそうやって見てるだけなのか」

もう片方の視線はもっと遠く、薰が先程まで眺めていたガードレールの向こう、一段低くなった通りの方へ向けられていた。

——見ているだけ。

彼らが言っているのは日栄一賀のことだ。彼らが、一度は命を奪ってしまった負い目からか、以来ずっと守ってきた「最強最悪」と呼ばれた男。

そう、薰はずっと彼の喧嘩を見続けてきた。

それくらいしか彼にはできなかつたから。

「あんた、あの人の身体のこととは知ってるんだろう？」

咎めるような口調。

知っている——。しかし、何故彼らがそのことで彼を咎めなければならぬのか。何故彼が咎められなければならないのか。薰は視線を通りへ戻した。

話題の当事者は、腕や足を「壊され」て転がる被害者を残してもういなくなっていた。

薰は息を吐いて単車のハンドルに手を掛けた。

「待てよ」

双子がついっと彼の前後を塞ぐ。

「俺に何をしろって言うんだ」

薰はハンドルから手を離して所在なくシートに置いた。

日栄一賀は好きこのんで諍いを起こしている。いつも一人で勝手をやっている。「最強」なのだ、喧嘩して負けるところなど見たこともない。加勢してやったとしても疎まれこそすれ恩に感じられることもないだろうし、そもそも加勢してやる必要があったことなど一度もない。身体が悪いことは知っているが、それが彼のハンデになっているところだ。だから彼は「最強」と呼ばれ続けてきたのだ。

「しろなんて言っていないさ」

双子は意外な言葉を口にした。

「目障りなんだよ、あんた」

二人は持っていた学生鞆をぼとりと落とした。

薰はシートを押して単車から飛び降りた。

——速いっ。

薰の着地を狙って二人の蹴りが足元と頭を同時に払う。

彼らの動きは薰の予想以上に俊敏だった。かわすのが精一杯で、手について地面に転がる。

二人はくるりと身体を回して続けざまに踵を落とした。

「何もしないなら近付くな」

「鬱陶しい」

薰はそのまま地面を転がって二人から逃れた。

——何もしないなら近付くななんて、やっぱり何かしろってことじ

やないか。俺に何を期待している？

「あいつに助けが必要かよ」

薫は飛び起きて二人から離れた。

「龍騎兵の成瀬薫、あんたなら止められるはずだろ」

一中のロシア人の双子——確か名前は相原裕紀と相原浩己。どっちがどっちなのかは薫には判らなかつたが、一人が彼に殴り掛かった。

——何故そんなことが言える。

薫はその拳を避けて後ろへ逃げた。

薫が一賀に直接関わったのは、彼が一高龍騎兵に入ってからだ。それまで噂には聞いていた日栄一賀は、中学一年当時から高校生を相手にもめ事を起こして、薫が初めて会ったときにはすでに「最強」と呼ばれていた。

彼は先輩から言付かつて一賀が龍騎兵と争うことのないよう見張ってきたのだ。龍騎兵はこの近在では最大最強のチームだ。数を頼めばいかに一賀と言えどもただでは済むまい。先輩から、一賀に対する不干渉の約束を取り付けてやるのが、彼にできる精一杯のことだったのだ。一賀が中学生の間は、龍騎兵は手を出さない——。それだけでも彼への負担は軽くなっているはずだった。

一賀とも何度も話をした。些細なことで争って、余計な恨みを買うことはないだろうと。

しかし、彼は薫の言葉などまともに聞こうともしなかつたのだ。

「あいつが他人の言うことなんか聞くかよ」

双子の攻撃はびつたりと息が合って、効率的だった。一方が攻撃するときには、もう一方が必ず薫の逃げるスペースを潰すように回り込む。逃げるが勝ちが信条の薫でも逃げ場を限られたのでは受けるか反撃するかしなく、たちまち追い詰められてしまった。

「二対一なんだ、遠慮すんなよ」

ろくに抵抗しない薫の退路にはもう壁が迫っていた。

二人の運動神経と立ち位置から言って、次に攻撃されたら逃げることはできない。

薫は自分からふらふらと壁に背を付いた。

「龍騎兵はあいつには手を出さない。それ以上何が望みだ」

言い終わらないうちに一人が薫の腹に膝をめり込ませた。前のめりになる彼の喉元を腕で押さえ付ける。

「あんたは何でそうなんだ」

薫は押さえ付けられるままに上向いた。

薄茶色の瞳が彼を見下ろす。

「縫ろうとする人間に届かないような手の出し方なら止めろよ」

ずきりと胸が痛んだ。

頭を締め付けられて息が詰まる。

——俺に何を——。

相手の苛立ちが喉元に伝わる。震える腕が抑えきれない感情を伝える。縫ろうとする人間に届かない、手——。

——あいつは俺の助けなんか必要としない。俺には誰かのために差し出してやれる手なんかかない。俺では何もしてやれないのに。俺では誰も守れないのに。それなのに俺はまだ——。

「浩己、何やってる」

薫にも聞き覚えのある声が、彼が自己の思考の呪縛に捕らわれるのを寸前で引き戻した。

「日栄さん」

浩己と呼ばれた方は薫を睨み付けて口惜しそうに手を離した。

薫は解放されて大きく息を吐いた。

「やめとけ、相手にするだけ時間の無駄だ」

——一賀。

「日栄さん」

一賀の抑揚のない声、それに対する銀狐の抗議する声——諦めと諦

めきれない思い。薫は一賀の聞き慣れた物言いにほっとした。浩己と裕紀の言葉は彼の身体には痛すぎた。

「お前たち、御節介すぎるんだよ」

一賀の冷たい瞳がかえって心地いい。

彼は強い。その強さは薫を安心させる。

「俺たちはこういう奴を近くで見たいだけなんですよ」

浩己ではない方——裕紀が薫に視線を投げる。

感情のある瞳が胸を刺す。

一賀を守ろうとする二人は彼を不安にさせる。

胸が痛む。

「——発ずつにしとけ」

一賀はくるりと踵を返した。

二人は舌打ちして拳を握った。

思いを込めるように目を閉じる。

薫も目を閉じて大人しくそれを待った。

「あんたはっ!!」

二人の拳は全く同時に薫の背後の壁に叩き付けられた。

吹き付けの表面が剥がれ落ちる。

振動が薫の身体にも伝わった。

心臓が痛む。

「俺たちからはこれで最後だ」

恨めしそうな二人の声が重なった。

ゆっくりと拳を戻して一賀の後を追う。

薫は壁に背を付いてその場に座り込んだ。

——痛……い……。

激しい心臓の痛みに、薫はそのまま意識を失った。

「何だ？」

「俺たちに何か用か？」

相原裕紀と相原浩己は、下校途中、人通りの少ない公園脇の歩道で一人の女子生徒に道を塞がれた。

見覚えのない顔。知らない気配。制服は彼らと同じ一高のものだった。

「初めて御目にかかります。私、一年七組に在籍しております、相本沙綾という者です。突然お引き留めして申し訳ありませんが、一時ほど私たちにお付き合い戴けませんでしょうか」

色白の大人しそうな少女は丁寧に言葉を並べて深々と頭を下げた。肩口から緩くウェーブの掛かった柔らかな髪がこぼれる。

——私たち？

二人は沙綾の言葉で視線を彼女から外した。——ほかに誰かいるのか？気配がない。

「同じく一の七、田中西だ。龍騎兵の相原だな」

声は少し高いところから降ってきた。

公園の、歩道へ張り出した木の、上か——。

二人は声のした方へ顔を向けた。

がさがさと枝が揺れ人影が舞い降りる。

木の葉と一緒に小柄な少女が地面に降り立った。

こちらも見覚えのない顔。

——龍騎兵。「そういう」用件か。

裕紀と浩己は互いに顔を見合わせた。

「そういう」用件は減ってきているものとはかり思っていたが、こんな女の子たちから「龍騎兵」の名前を聞くななんてなあ。二人は軽く

溜息をもらした。

「龍騎兵」は、彼らが入学する前の年にはすでに解散してしまっていた一高の校区を縄張りとする暴走族の名だ。この辺りでは最大のチームで数々の伝説も残っている。彼らも確かに中学時代には、龍騎兵との関わり合いがなかったわけではないが、「龍騎兵の相原」などと呼ばれるほど関わった覚えはなかった。

「申し訳ないけど、俺たち、龍騎兵なんて知らないよ」

「何中の出身か知らないけど龍騎兵なんて随分前から聞かないだろ」

二人はショートカットでボーイッシュな娘に向かって言ってみて聞かせた。龍騎兵の解散は一般生徒の間でも周知の事実だ。最後の総長だってもう卒業してしまっている。龍騎兵の伝説はもう昔の話なのだ。

彼女たちが何をどこまで知っているのかは知らないが、物騒な話は遠慮したい。

二人は娘たちの気配を計っていた。

沙綾とかいう娘はごく普通の女子高校生だ。しかし、西というこの娘は彼らの前で気配を消して見せた。ものを目で見ていない彼らの前で。先輩たちの例もある、ごく普通の女子高校生とは言えなかった。

「なら、」

と、西は挑戦的な瞳を二人に向けた。

「お茶会同好会の相原でいい。ちよいと相手になってもらおうか」

彼女の雰囲気は彼らの先輩に少し似ているようだった。

いやーな予感が頭を過ぎる。

「お茶会の」と言い換えられたところで実質は変わっていない。穏便な用件、例えば——そうあってくれればどんなにいいだろうが——交際の申し込みなどでは決してないことだけは確かなのだ。

「できれば勘弁してもらいたいんだけどな」

裕紀は無駄とは思いつつも一応申し入れてみた。こう正面切って挑まれると対処の方法が思いつかない。

「相原。会長のところは直接行ってもよかつたんだよ」

西の挑発的な態度は変わらない。

会長——お茶会同好会会長、日栄一賀。彼に触れれば二人を刺激することを知っている口振りだ——。そして、龍騎兵を知っていて日栄一賀を恐れない。——何者だ？

「でも、日栄先輩は環女史以外の方とはお付き合いなさらないというお話でしたから」

沙綾がにこやかに口を挟んだ。

そうだった。沙綾の言葉が二人に思い出させた。

「あの人が相手にしない連中を俺たちが相手にするいわれがない」
一賀はもう「最強最悪」と呼ばれていた頃の一賀ではない。誰の挑発にも乗りはしないだろう。彼が争わないなら彼らとて彼を守る必要はない。

「沙綾ちゃん、余計なことは言わなくていいの」

西はちつと舌打ちして拳を握った。

「五分だ。反撃する気がないなら手を抜いてやる。躲せるものなら躲してみなっ」

返事を待たずに西は二人に飛び掛かった。

——手を抜いてやるだと。

——誰に向かって言ってる。

裕紀と浩己はひょいと飛び退いて歩道の脇に鞆を置いた。

争いごとは好まないが、なめてもらっては困る。

手を抜いて、五分で俺たち二人を落とすって言うのか。

二人はくると西の方へ向き直った。

「見えてないってのはホントだな」

耳元で声。

「なっ——」

西はいつの間にか二人のすぐ傍に立っていた。

——浩己っ。

裕紀は咄嗟に弟を蹴り飛ばした。

西がであろうことか銃を抜いたからだ。

構造は——ガス銃。しかし、プラスチックの弾ではなくアルミ製の弾が詰めてある。

「飛び道具かよ」

——何て凶悪な女——。

西は容赦なく引き金を引いた。

「龍騎兵のくせに田中の西さんを知らない方が悪いんだよ」

弾が裕紀の頬を掠めた。

躲せたのではない。相手がワザと外したのだ。

ちくしょう。田中西だと。知るかよ。

裕紀は追いかけてくる銃口を避けて回り込んだ。

「視界」の端、西の背後で浩己が立ち上がる。

しかし、裕紀の方を向いたまま西は笑顔で浮かべていた。

左腕を背中へ回す。

「浩己っ」

裕紀は西に掴みかかった。

同時に浩己が西の左手の銃を狙う。

西は笑顔で小さく舌を突き出した。両手を引いて腕を交差させ自分の脇の下へ銃を隠す。

目標を失った二人は一瞬ずつ躊躇した。

その間に西は裕紀の方へ向いて腕を開いた。二つの銃口が裕紀の大腿ともう西の肩まで迫っていた彼の左の掌に突き付けられる。

ガスの抜ける音。

「ちっ」

裕紀は躲せないで悟るとそのままその銃を掴んだ。痛みが手足を突き抜ける。小さなアルミの弾は、人間の身体を貫通するほどの威力は

持っていなかったが、皮膚を破り浅く体内に食い込んだ。

血が滲む。

——この程度でっ。

裕紀は痛みを堪えて銃を奪い取った。

浩己が凶器を失った西の右腕を掴む。

西は右腕を掴まれたまま、左手の銃を裕紀の左大腿に向けて連射した。小さな弾とはいえ、数が集まれば肉を抉る。堪らず裕紀は膝を付いた。

「裕紀っ」

浩己は腕を引いて西の身体を引き寄せた。

彼女は浩己の懐でぐるりと身体を回して銃口を彼の脇腹に押し当てた。僅かの躊躇いもなく引き金が引かれる。

浩己は西の右手を力任せに捻り上げた。

西は銃を握ったまま左手を振り上げて浩己の首筋を殴り付け、そのまま腕を引っかけた浩己の身体を蹴って宙返りした。

スカートがふわりと彼女の身体を追い掛ける。

浩己は脇腹を押さえて膝を付いた。

撃ち込まれたのは一発ではなかった。

「あんたたち、実弾なら命はないよ。女に手加減してちゃ日栄一賀の代わりは務まらないんじゃないの」

西は浩己の前に立ちはだかつて銃を突き付けた。

——この女——。

浩己は俯いたまま西との間合いを計った。

——浩己。

頭の中に裕紀の声が響く。

——ああ。

浩己は飛び起きて足を振り上げた。

西の手から銃を弾き飛ばす。

「物騒な玩具使いやがって。——動くなよ」

裕紀は西から奪った銃を彼女に向けた。

しかし、西はそんな警告など聞きはしなかった。

浩己は殴り掛かってきた彼女の手を取って投げ飛ばした。地面に叩き付けることもできたが、やはり女の子の小さな手がそうさせることを躊躇させた。

——だめだ。俺たち、やっぱ、甘い。

西は猫のように身を捻って柔らかに着地した。

二人はその彼女を追って殴り掛かった。

裕紀と浩己のよく知っている先輩と違って、西は素手での立ち回りは得意ではないようだった。二人の攻撃を大きく避けて後ろへ逃げ

る。二人は、彼女が逃げるよりも少しずつ多めに間合いを詰めて、彼女の周りのスペースを埋めていった。

——もう逃がさない。

裕紀と浩己は僅かな時間差を置いて巻き込むように、残った西の間を閉じに掛かった。西の身体の左右から腰を回して蹴りを入れる。逃げ場所ももう少ない。一撃目を躲したとしても二人とも二撃目を用意している。怪我しない程度に——。

しかし。彼らは二撃目を放つことができなかった。

一撃目を躲した西の立ち位置に沙綾が立っていたからだ。

——何で。

二人は回し蹴りの途中で踵を引き付けてその場にしゃがみ込んだ。

——何でこの娘がこんなとこに。

「全く甘いねえ、銀狐。沙綾ちゃんをただのギャラリーだと思ってたのか？」

「私たちの勝ちですわ」

腕を組んで立つ西の隣で二人のこめかみに銃口を突き付けたのは上品

な笑みを浮かべる沙綾の方だった。

★

★

「先輩っ、知ってたんですか、この女」

翌日図書館の五階で、裕紀と浩己はさっそく西と沙綾に再会した。

「田中の西さんと言えば、二中じゃあ知らない者はいないんだけどねえ」

「あんたたち知らなかったの」

西讃第二中学出身の不知火羅牙と碧嶋美希は、神田恵子に傷の手当をしてもらっている二人にここに顔を向けた。

「知りませんよ。一中じゃあ俺たちの相手は高校生ばっかだったんだから」

恨めしそうな視線を順繰りに先輩たちに送る。

「それにしても西さんは相変わらず容赦ないねえ」

二人の視線をわざと避けて、同じく二中出身の石田沙織が治療中の二人の傷に視線を落とす。

「全くですよ。こんな凶暴な女、見たことありませんよ」

浩己は制服のワイシャツの前を開けて脇腹の傷を恵子に見せていた。喰い込んだ弾を昨夜のうちに自分たちで取り出したので傷を広げていたが、素人を相手にして彼らがこんなに傷を負わされることなど滅多にないことだった。

「あたしは容赦ないよ、例えば相手が会長でもね」

西は手に持ったティーカップの方に口を近づけて紅茶を啜った。

「だめだめ、西さん。一賀ちゃんには傷付けなくてよね」

慌てて恵子が手を振る。

「先輩たちは会長を甘やかしすぎですよ」

西は笑った。

彼女は、二中では知らぬ者のいない銃器マニアだった。しかも、収集が趣味だとか蘊蓄を語るだとかいうタイプではなく、「実用向け」の改造銃を扱っているというので密かに有名だった。

「お前、日栄さんに何かしたら承知しないからな」

浩己も睨み付けて釘をさす。

西の隣で沙綾がくすくすと可愛らしく笑った。

「日栄先輩、愛されてますわね」

胸の前で両手を組んでほうつと溜息を吐く沙綾に、

「溺愛しちゃってるからね」

美希が応じる。

「先輩、そういう誤解されるような言い方はやめてもらえますか？」

抗議する裕紀に、

「だってそうでしょ」と美希。

裕紀と浩己はぎこちなくならないように首を回し、西の様子を窺った。

彼女は、カップを片手に頬杖を付いて彼らの方を眺めていた。目が合うとにこっと笑う。少年っぽい面差し。

裏表のない真っ直ぐな感情。

邪気は感じられない。

しかし。

彼女は、彼女の本意を計りかねている二人に対し、

「銀狐。あたしには会長に借りがあるんでね。そのうちやるよ」

と、大胆不敵に笑顔で宣言したのだった。

煙草の——煙？

図書館五階の窓から一人ぼーっとグラウンドを眺めていた緒方竜は、目の前を立ち上る白い煙に眉を蹙めた。ここは学校の図書館だ。こんな所で誰が——。竜は視線を下の階へ落とした。

四階の、ちょうど真下の窓から黒い頭が一つ覗いていた。窓枠に肘を付けて少し身を乗り出すようにしている。黒の学生服、学生だ。煙はそいつの手元から立ち上っていた。

——うちの足元でどこのどいつや。

竜は何か投げるものを探してポケットに手をつ込んだ。

図書館五階のこの部屋は、彼ら「お茶会同好会」が、部室として使っている。元々図書館の三、四階は専門書や全集しか置いていないので一般生徒もあまり寄り付かなかったが、彼らが五階に部室を置いてからはますます敬遠するようになっていて、四階の窓から人が顔を出しているところなど、この二年、竜は見たこともなかった。

お茶会同好会は一昨年できたばかりの同好会で部員も少なく、活動もたまに寄り集まって茶会を開く程度のことだったが、創設時から学校中での存在を知らぬ者などいないはずだった。

初代会長成瀬薫、初代副会長内藤彩子、前会長日栄一賀——彼らが今はもう解散してしまった一高龍騎兵のメンバーだったことが知られていたからだ。中でも薫は龍騎兵の最後の総長だった。そのため、中学時代に龍騎兵に関わっていた者も「お茶会同好会」の縄張りである図書館では減多なことをしないのが常だった。

特にその昔「最強最悪」と呼ばれた前の会長、日栄一賀が喘息持ちであることが知られていたもので、彼が会長の間は校内で喫煙する者など一人もいなくなっていた。

それが。

「お茶会」の部室の真下で堂々と煙草をふかす者がいるなどというのは——。

——俺様をなめやがとんのか。

お茶会同好会の現会長である竜は、ポケットから取り出したアメ玉を下へ放り投げた。

狙って投げたわけではなかったのであたりはしなかったが、そいつは気が付いた様子で首を捻った。

襟元に緑の記章が見える。

——何や、一年やないか。

竜はちらりと見えたその記章を確認した。

まだここが誰の縄張りか知らないのか——。

しかしそいつは竜と目が合うとにと笑って手を振った。

——何、やと——。

知っている。そういう顔だった。そいつは真上に竜がいることを百も承知でわざと四階のその窓から顔を出していたのだ。

——あいつ。

竜はもう一度ポケットに手をつ込んだ。

くすりと笑う声が聞こえる。

竜は窓枠を思い切り殴り付けた。

ポケットから取り出したアメ玉をまとめて投げ付ける。

——待つとれ、今、下りて行つた。

しかし、窓を離れようとする竜の視界の端で、何か窓から飛び出した。

竜は慌てて窓枠に飛び付いた。

「あほう!!やめえっ!!」

下に向かって怒鳴りつける。

あろうことか窓枠に足を掛け身を乗り出しているやつがいる。そい

つが知らん顔で煙草をふかしているもう一人の頭の上に降り注ぐアメ玉を受け止めたのだ。

竜は見ただけで総毛立った。

「その関西弁、あんたが緒方竜だな」

そいつは窓枠に手を掛け、窓の外へ背を向けて、竜を振り仰いだ。

襟には緑の記章。一年生——。

しかし、竜はそれどころではなかった。

「あほんだら!!今すぐ下りてつたる、そこ動くんやないで!!」

鳥肌が立ち、指先から血の気が引く。

すぐ下りて行くとは言ったものの、竜はそこを動けなかった。

そいつが竜の言葉もお構いなしに窓から身体を出して煉瓦風の模様になっている壁面のタイルの目地に手を掛けたからだ。

竜は窓枠にしがみついて手を差し伸べた。

一刻も早く止めさせなければ自分の神経の方が保たない。

そいつは当たり前のように竜の手を掴んで五階の窓に飛び上がった。

「さんきゅー先輩v」

まだ中学生のようなそいつは幼さの残る笑顔を竜に向け、

「俺、松本、松本王子。あんたが今ここのナンバー1なんだってな」

と言った。

その言葉は、竜にとってはイヤミ以外の何ものでもなかったが、彼にはまだ反論するための心の余裕が戻ってはいなかった。

「あほう!!俺に用があるんやったら早う入って来んかいっ」

窓から離れて相手に下りてくるためのスペースを空けてやる。

小柄な一年生はびよんと彼の目の前に下り立った。

小さい。そいつは、長身の竜よりも三〇センチばかりチビだった。

「お茶会同好会会長、緒方竜。相手になってもらおうか」

チビは肩を回して拳を突き出した。

竜は漸くほうつと息を吐いた。

「ええ度胸しとるやないか、こんクソガキ。いっぺん泣かしといたろか」

「その言葉、そのまま返すよ、先輩v泣いても知らないから」

チビ——松本王子は、拳を口元に寄せて「ちゅっ」とやった。

「表え出させ!!」

竜は手近の椅子を蹴り飛ばして天井を指差した。

「そうこなくっちゃ」

満面の笑みを浮かべて王子は窓に飛び付いた。

★

★

「待ちかねたよっ、先輩」

竜が大慌てで屋上に上がっていくと、王子はもう屋上のコンクリート製の手すりの上に立って彼を待っていた。

「こんクソガキ、何でもええわい、かかってこんかいっ」

王子は四階から五階の窓へ壁づたいに上がってきただけでは飽き足らなかったのか、屋上へ上がるのにも五階の窓から飛び出した。

どうやったたらそんなことができるのか竜の常識では考えられない神経の図太さだった。

「かかって来るのはあんたの方だよ、先輩」

王子は片手を腰に当てて拳を突き出した。

その仕草に竜は嫌な既視感を感じて眉を顰めた。

「——何や、前にもこないなことが——」

「へーい、かもーん」

王子は人差し指でちよいちよいと手招きした。

びくんと嫌な思い出が竜の身体を震わせた。

「——あいつか。」

石田沙織の人を小馬鹿にしたような笑顔が頭を過ぎる。

身の軽さと言ひ、人を馬鹿にしたような言動と言ひ、いちいちあの女にそっくりなのだ。

竜は、怒りにまかせて飛び込むのを躊躇った。

沙織のやり口はよく知っている。ああやって挑発しておいては逃げの一手で、必死で逃げているにも関わらずその素振りさえ見せず、攻め手が僅かでも隙を見せれば絶妙のタイミングで足下を掬うのだ。迂闊に乗せられるのは得策ではない。

「いつまでもそないなとこに立つとらんと下りて来んかい」

王子に対する警戒以外の理由もあつて手すりに近付けない竜に、「力尽くで引き擦り下ろしてみたらどう？」

と、王子は手を差し出した。

王子の背格好は沙織とほとんど変わらない。不知火羅牙のような常識外れた馬鹿力の持ち主がそうそういるとも思えないが、あの体格で、竜と力で勝負しようというのだろうか。

——何企んどのや。

竜はそろーっと手すりに近付き王子の手を掴んだ。

何を企んでいたとしても、羅牙のような念動力者でもない限り、こんなチビに止まっている彼の身体を持ち上げることは不可能——竜はそう判断したのだ。

しかし、王子は、

「先輩、随分と腰が退けてるよ」

と笑うと、竜の手をしっかりと握ったまま、背中から手すりの向こう側へ身を投げた。

軽いとはいへ、王子の全体重が位置エネルギーを運動エネルギーに変えながら竜を引き寄せる。

「何すんねやつ!! あほう!!」

あつという間に手すりまで引き寄せられて、竜は声を上げた。

幅のあるコンクリート製の手すりは返って掴まるところがない。

竜は必死の思いでコンクリートの固まりにしがみついた。

腕が軋む。

彼の手を握ったまま王子は壁に垂直に立っていた。

王子の背後、遙か遠くに地面が見える。

ぐるりと目が回った。

——あかん、落ちる。

そう思った途端、下半身から踏ん張る力が消え失せた。

恐怖で麻痺して感覚さえない。

「いい天気だ」

王子が気持ちよさそうに空を仰ぐ。

次の瞬間、竜の身体は手すりを乗り越えていた。

内蔵も何もなくなってしまったかのように身体に風が通る。

「いやや——!!」

一瞬の浮遊感の後、王子の手に引かれて竜の身体は真逆様に落下を始めた。

★

★

「竜ちゃん」

額に冷たいものを当てられて竜は目を開けた。

肩が痛む。

どういいうわけか頭の上へ伸ばしたままになっている腕が動かなくなつた。

——何や？美希はん……？

竜は何がどうなっているのか解りかねて首を傾げた。

彼の顔を覗き込んで手を差し伸べているのは、クラスメートの碧嶋美希。長い黒髪が風に吹かれて揺れている。

よく見ると自分の手の先にもよく知った顔が彼を覗き込んでいた。
不知火羅牙——。

二人とも窓のようなどころから顔を出していた。

竜は身体感覚と二人の構図に違和感を感じて身体に力を入れた。
——!!

全く脱力していた身体に全感覚と先ほどまでの記憶が戻る。

「羅牙!!」

竜は慌てて自分の手を握る羅牙の腕に縋り付いた。

その手以外に彼の身体に触れているものは何もない。その細腕だけが彼の身体を支えているのだ。

羅牙が彼を落としてしまうとは考えられないが、地に足が付いていないなど、堪えられない。

「羅牙」

彼女は黙って視線を上の方へ向けた。

「先輩、楽しませてもらったよ」

羅牙と美希の頭上の図書館の壁に松本王子が垂直にしゃがみ込んでいた。四階の窓。銜え煙草の男が王子の手を掴んでいる。

——あいつら……。

「天野光だ。緒方竜、あんたの攻略法はリサーチ済みなんだよ。残

りの一年、大人しくしてもらおうか」

男は口の端から煙を吐きながら竜を見下ろした。

王子のものはまた違う挑発的な瞳。

——大人しゅう……せえやと?

竜は落ち着かない頭で一生懸命考えた。

——この俺様……大人しゅうせえやと?——こ……こないなことで俺様に負けを認めつつしゅうんか——。

竜はぎいっと歯を鳴らした。

「こんクソガキ……人をなめんのもたいがいにしときや……」

竜は羅牙の手を引いて自分の身体を持ち上げた。

認めたくはないが羅牙の力は解っている。

彼女の力は安心していい支えなのだ。

竜はそれを頼りに壁を蹴った。

三階の窓に足を掛けて壁に座り込んでいる王子に手を伸ばす。

「先輩、落ちるよ」

王子がせせら笑う。

竜は羅牙の手を振り払って王子に飛び付いた。

四階の窓で王子を支えている光の腕に竜の体重が掛かる。

王子の手は簡単に光の支えを手放した。

「松本!!」

王子の行動は光にも予想外のことだったのだろう。口元からほろりと煙草が落ちる。

「クソチビ、殺す」

竜は空中で王子の両手首を掴んで身体を地面の方に向けさせた。

力は強くない。

軽い身体は驚くほど簡単に竜の思うままになった。

「松本!!」

竜の背中を光の声が追ってくる。

——泣け泣け、あほんだら。

竜は王子の足を押さえ込み身体に膝を乗せた。

——様あ見さらせ、俺様をなめくさったばちや。

地面が目前に迫る。

「天ちゃーん」

王子は竜に手首を掴まれたまま光に手を振った。

「先輩!!」

光の声が竜を呼んだ。

竜はちっと舌打ちした。

——あほや——俺。

★

★

「頭悪いとは聞いてたけど、ここまでバカだとは思わなかった」
天野光は、ふうふう文句を言いながら、ふわふわのエアマットに埋もれている二人の身体を引きずり出した。

竜の身体の上に王子がちよこんと座っている。

「ホントバカだな」

羅牙もその脇で首を縦に振る。

「でもまあ、さすが竜ちゃんというかさ、あの土壇場でよくやるよねえ」

エアマットを準備していた美希は、それこそギリギリまで落ちていく二人を見守っていた。竜に押さえ込まれた王子の身体が地面に叩き付けられる寸前に、エアマットを展開するはずだった。だが、それよりも前に竜が身を捻って体を入れ替えたのだ。

美希のエアマットが二人の身体を柔らかく受け止めたものの、王子の身体はまともに竜の上に落ちていた。

「お前もだ、松本。バカにも程がある」

光はいらいらと煙草を取り出して口に銜えた。

「死ぬかと思つたよ」

当の王子はいたって呑気だ。竜の身体の上に座ったまま一同に笑顔を向ける。

「天野、うちとやりたきやもうちつと修行してから来るんだな」

羅牙は王子を抱き上げて光に突き付けた。

美希が空中から王冠を出して王子の頭に乗せる。

——二中のダーティペアか。

光は羅牙の手から王子を受け取った。

女にでも抱き上げられるくらい軽い身体。

——こいつをぶつけるには無理があったか。

光は王子を地面に下ろしてやりながら煙を吐いた。

「緒方竜さえ叩いておけばほかの者は手を出さない」——あいつはそう言ったが——。どいつもこいつもとんだ食わせ者じゃないか。

あいつ、俺たちの方を試しやがったのか。

彼は王子と竜を見比べた。

呑気な笑顔と氣を失って長々と伸びている間抜け面。

緒方竜——極度の高所恐怖症のくせに三階の高さから飛ぶなんて。しかも、それほど——恐怖を忘れるほど頭に來ていたのに、何故、最後の最後で王子を庇うことができたのか。

「今日のところは君たちの負けだね」

美希がエアマットをぼんと叩くとしゆるしゆると空氣が抜ける。

「克紀の手駒だって聞いてたからどんな奴かと思ってたけど」

羅牙が竜の身体を引き起こす。

「竜ちゃんなら助けてくれると思つてた？」

美希が笑う。

——緒方竜が？松本を助けると思つてたか、だと？何で——。

「お前さんが呼んだら？——緒方は助けるんだよ、絶対にね。お前さんは、それを計算に入れててよかつたんだ。克紀ならやってるな」

不知火羅牙はそう言った。

——俺が——。

光は耳の後ろに熱を感じた。

「天ちゃん、俺やだぞ。そんなことしなくても俺様勝つんだから」

口をとがらせて拳を構える王子に、

「バカだな王子様は。自分の相棒も信頼させられない奴がうちに勝てるかよ。相棒にあんな声出させてるようじゃまだまだ」

羅牙は意地悪に笑いながらそう言った。

「待って下さい、お姉さん」

「やだ——っ!!」

碧嶋美希は帰宅途中、木刀を持った怪しい男に追われて逃げ回っていた。いや、追ってくる男を美希は全く知らないわけではなかった。クラスは違うが同じ高校の同じ一年生だ。名前だっけ知っている——榊征四郎。剣道部が獲得に躍起になっている期待の新人でちょっとイイ男だ。

しかし。

いくらイイ男でもいきなり同級生を「お姉さん」呼ばわりすることはなからう。

美希はガタイのイイ好青年に会い頭に土下座で「お姉さん!!」と呼び掛けられて跳び上がった。

「やだー!!何でボクんトコに來んのさーっ!!」

硬派の代名詞のように噂されていた榊征四郎がよもやこのような行動に出るとは、彼のファンクラブを作ろうとしていた女生徒たちには想像もできない。

美希の旺盛な想像力を持ってしても容易には思い描けない現実がすぐそこまで迫ってきていた。

二人の後を、美希の相棒の不知火羅牙がにやにや笑いながら飛ぶような足取りで付いてくる。何とかしてやろうというような気は全くなさそうだ。

「お願いしますっ、話を聞いて下さいっ」

人気がない路地に美希を追い込んだ——と言うより、美希の方が人目を憚って逃げ込んだのだが——征四郎は、また地面に手を付いて頭を下げた。

「だーからー、そういうことすんのやめてっば」

美希は征四郎の腕を掴んで手を上げさせた。

話を聞いてやろうにもさっきから立ち止まると土下座をしようので、人通りの多いところでは話もできない有様なのだ。

——ボクのことを「お姉さん」呼ばわりするくらいだから用件は判ってるけどさ。

美希は征四郎を立たせて膝を叩いてやった。

「お姉さんっ!!」

征四郎は美希の肩をひっ掴んで正面から見据えた。

その後で堪りかねた羅牙がぶつと吹き出す。

「真琴さんのお付き合いを——」

と、征四郎が言いかけたとき。

「貴様っ!!姉上に何をしているっ!!」

良く通る高い声とともに小さな影が二人の間に降ってきた。

紺のセーラー服。

白いリボン。

長いストレートの髪を頭の上の方でポニーテールに結んだ娘。

「真琴お」

娘は帯で仕立てた刀袋を持っていた。

「真琴さんっ」

征四郎は両手をその刀袋に入っているもので弾かれて後ろへ跳び退いた。

碧嶋真琴——美希の妹だ。

「姉上を襲うとは不届き千万」

真琴は刀袋に入ったままのそれを構えて美希の前に立ちはだかつた。

「真琴さんっ、俺はっ」

慌てて手を振る征四郎に、

「問答無用!!」

真琴は打って掛かった。

征四郎は反射的に、持っていた木刀で受け止めた。中学一年生の少女のものとは思えない重い一撃。

真琴は自分より一回りも二回りも身体の大きな征四郎を力尽くで弾き飛ばした。

間髪を入れずに打ち掛かる。

重さ数キロはあるはずのそれを軽々と振って征四郎を攻め立てる。

「真琴さんっ、誤解だ、俺はっ」

しかし、征四郎はその真琴の攻撃をすべて受け止めていた。

「さすが剣道部期待の星。真琴ちゃんも互角に立ち合ってるじゃな

いか」

不知火羅牙は面白そうに美希に囁いた。

彼女は相棒の妹、真琴の腕前を良く承知していた。真琴が幼い頃から鍛錬しているのは剣道ではなく剣術だ。真剣を手にして敵に当たるための技術は、剣道とは全く違う。

「真琴さんっ、話を聞いて下さい」

受ける一方とはいえ、真琴の太刀筋を見極められるというだけで、榊征四郎は大したものだと考えた。

「まずいよ、征四郎くんがこんなにできるなんて」

いつもは楽天家の美希も妹に聞いただけは楽天的にはなれなかった。真琴の性格は苛烈だ。プライドも高い。剣の腕にもそれなりの自信を持っている。その真琴の剣を楽々——少なくとも美希にはそう見え

た——受け止めるなんて。

「久々に真琴ちゃんが抜くところが見られるな」

美希の心配を余所に羅牙は楽しそうだ。

「他人事だと思っでさ」

美希は頬を膨らませた。

「他人事だと思っでさ」

美希は頬を膨らませた。

真琴は真剣を持ち歩いている。放っておくと何をしてくるか判らない。今までも何度かそれを抜いたことがあるのだ。笑って見守るには危なっかしすぎる。

しかし美希を守ろうとしているときの真琴は、当の美希の言うことでさえ聞こうとはしないのだ。止めるには実力行使しかない。

「羅牙、面白がってないで止めてよね」

この場で一番穏便にかつ確実に真琴を止めることができるのは羅牙だけだ。美希は相棒の方に顔を向け、腰に手を当てて二人を指差した。

「危なくなったらな」

羅牙は腕を組んで道端の電信柱にもたれ掛かった。

羅牙の目から見ても征四郎と真琴はほぼ互角だった。いかに真琴が優れた剣術の使い手とはいえ、まだ中学一年の少女だ。剣道の素人ではない征四郎相手では技術の差より体格と腕力の差の方がまだ大きかった。

「貴様っ」

真琴は刀袋の口を留めてある紐に手を掛けた。

「征四郎くんっ、逃げてっ」

美希は無駄とは思いつつながら声を掛けた。征四郎には逃げ出す気など更々ないのだ。彼の方には逃げなければならぬ理由などない、それどころか彼には真琴にどうしても伝えておかなければならない大事な用件があるのだ。

「手を抜くとは私を愚弄しているのかっ」

真琴は紐を解いて刀の柄に手を掛けた。

目の前の不埒者は彼女の攻撃を受けているだけだ。——剣術の心得があるのに反撃もしてこないとは、女子供と侮っているのか。

真琴は刀袋の上から左手の親指で刀の鐔を押した。

「真琴さんっ」

征四郎は木刀を下に向けて背後に引いた。

彼には彼女を傷付けることなどできはしない。何とかして誤解を解いてもらわなければ。征四郎は膝を付こうと片方の足を引いて身を屈めた。

しゅいん、と、鞘が鳴る。

真琴は真つ赤な顔で愛刀を抜き放った。

刀身に反りのある日本刀をスムーズに抜くことは素人が思うほど簡単なものではない。身体の小さな真琴には尚更のことだろう。それなのに彼女は自分の腕よりもずっと長いそれをいとも簡単に抜いて見せた。

——何て——。

征四郎は息を呑んだ。

木刀を構え直す。

彼女を傷付けることはできない。——しかし——、彼には彼女のプライドを傷付けることもできなかった。

征四郎に手加減されていると思うことは、真琴にとって、負けることよりも屈辱的なことなのだろう。

「真琴っ」

美希は、真琴を気にしながら羅牙の方に顔を向けた。

真剣と木刀では勝負にならない。

真琴の腕力では相手に重傷を負わさずに済む位置で剣を止められるかどうかは五分だ。

真琴が本気である以上、征四郎が受けるつもりならそれを止めることができるのは羅牙だけなのだ。

しかし、

「真琴ちゃんを信じなさいって」

羅牙はいったって呑気に手を振った。

彼女はこれまで何度か真琴が「抜く」ところを目撃していたが、相手にかすり傷以上の傷を付けたところは見たことがなかった。美希

は、こと真琴のことになると過剰なのだ。

榊征四郎は手加減などしていない。ただ反撃していないだけだ。真琴の腕は信じていい。羅牙は真琴の剣先を目で追った。

空気を割いて刀身が弧を描く。

「覚悟!!」

真琴は渾身の力でそれを振り下ろした。

二人の足元からすうっと風が吹き寄せる。

きいんと微かな音がして。

剣先は征四郎の頭から十数センチのところまで止まっていた。

——よし、止まった。

羅牙は美希にちらりと視線を送った。

だが。

違う——。羅牙はすぐに二人に視線を戻した。真琴ちゃんが止めたんじゃない——。

「真琴さん——」

征四郎は居たたまれない様子で口を開いた。

「お姉さんに許可をいただいていたからと思っていたのですが——、俺と——、その、お付き合いしていただけないでしょうか」

美希がぼとりと鞆を取り落とす。

——なんて間の悪い告白。ぶきっちょにもほどがある。

羅牙は美希の鞆を拾ってやって、ついでにぼかーんと開いた口もふさいでやった。

「あいつ、榊征四郎、優等生みたいな顔しやがって。とんだ食わせ者だな」

「何で？」

美希は羅牙の言葉に目をぱちくりさせた。

「まじめに剣道やってる奴があーんな止め方するかよ」
あんな。

征四郎は真琴の真剣に木刀の柄を尻から垂直に食い込ませていた。しかも、それでも止められなかった剣を、左手首の腕時計で受け止めていた。

「一つ間違や、両腕ばあだよ」

羅牙の言うとおり、刃が僅かでも横に滑れば左手首は両断される。左手の支えがなければ柄を握った右手だとしてただでは済むまい。

「何て無茶を」

美希はもう一度口をあぐりと開けた。

真琴はたつぶり十秒以上硬直したのち、征四郎の木刀の柄から刀を引き抜いた。くるりと刃を回して鞘に収める。そして、征四郎を一睨みすると無言のまま踵を返した。振り返りもせずびよんと塀の上へ跳び上がる。

「真琴さんっ」

征四郎は真琴を追いかねてべたりとその場に膝を付いた。がっくりと肩を落として美希を振り返る。

「すみません」

征四郎は地面に手を付いて深々と頭を下げた。

美希は「げっ」と言って両手を振り上げた。

「せせせ征四郎くん、そそそゆことはやめようよ」

手を上げさせようとしても征四郎はびくとも動かなかった。

「すみませんっ、俺っ…」

ただただ平謝りするばかりである。

「征四郎くん」

美希は困り果てて征四郎の脇に座り込んだ。

そこへ。

「貴様っ」

地面すれすれに頭を下げる征四郎の鼻先に鈍く光る切っ先が突き付けられた。

「姉上を煩わせるな」

くるりと刃が上に向けられる。

征四郎は慌てて面を上げた。

「真琴さんっ」

立ち去ったはずの真琴がそこに立っていた。

「貴様、名を名乗れ」

押し殺した声で絞り出すようにそれだけ言う。

「榊、征四郎ですっ」

跳び上がらんばかりの勢いで征四郎は名前を叫んだ。

真琴はまた舞うように刀を鞘に収めると踵を返した。

「榊征四郎か、覚えておく。この次も私の剣を止められるとは思わなよ」

そして、また、びよんと塀に跳び上がって姿を消した。

「次って…」

放心状態の征四郎の肩を、

「また会う約束か、よかったな」

と、不知火羅牙がぼんと叩いた。

これ以降、榊征四郎はその想いに反して、碧嶋真琴の立ち会い相手として、彼女がもう少し大人になって姉離れするまで、三年以上の交際期間を持つことになる。

不知火羅牙VS緒方竜 あとがき

書き上げるのは順不同になりましたが、「喧嘩百景」の第一話です。
【お茶会同好会シリーズ】で最も蔑ろにされている緒方竜の転校当初の話です。シリーズの主人公で、シリーズ中最強の人物、不知火羅牙さんとの対戦。

羅牙さんは超能力者だから竜ちゃんが負けても仕方がないんですけど、女の子に力業で負けちゃうなんてちょっとかわいそうですね。
おまけに竜ちゃん、超高所恐怖症なのが羅牙さんに知られちゃうし。

話題になってる「龍騎兵」は、薫ちゃんたちが三年生になるときに解散しちゃいました。でも近隣の生徒さんたちはまだあると思ってるんですね。「龍騎兵」っていう団体にびびってるんじゃないかと、薫ちゃんや一賀ちゃんに「龍騎兵」っていう肩書きが付いてきているから彼らがいる限り「龍騎兵」はなくなるのですね。だから竜ちゃんがお茶会同好会の会長になる頃には「龍騎兵」は本当に伝説になってしまいます。

最近、【惑星ブルージャの盗賊シリーズ】ばかり書いてたから、みんな柄悪くなっちゃって。特に羅牙さんは、気をつけないとすぐ、リイみたいになしゃべり方になっちゃうから。きみたち女子高校生なんだぞ。

で、今回の話も二日ほど書きました。書き上げて驚いちゃうのは三話ともページ数がちよっぴりで終わってるということ。調節したわけじゃないのに。いや、ページ内に収まればいいなとは思ってたけど。やっぱ、お茶会の人たちはしっかり動いてくれるわ。また頼むね。ぢゃ、みなさんまた会いましょう。

平成十一年十月五日

緒方竜VS石田沙織 あとがき

【お茶会同好会シリーズ】で最も蔑ろにされている竜ちゃんと、最中世の中をなめている女子高校生石田沙織ちゃんの対戦でした。

設定資料とか見てたら急に書きたくなくなって、仕事で二日書いてみました。

懐かしいキャラですね。懐かしすぎる。

わざわざばらさなくともいいんですが、この話、昭和五十九年の話です。いやはや、設定には実歴は使うなっことですね。今では登場人物全員、三十路に入ってしまった。薫ちゃんなんか学校の先生になっちゃって…はっ、族上がりの先生って、某グレートティーチャーとかぶってる…。

これから書く予定の【お茶会同好会シリーズ】もすべて昭和のお話かと思うと、このままお蔵入りにしてしまおうかとも思っちゃいます。

でも、話の中に書かなければ年なんてどうでもいいことだし。いっか。

近頃、自分が学生でないせいとか、学園物のキャラを新しく考えられないので、今いる人たちが何とかやっつけていきたいと思えます。この連中はかなり性格固まってるからなあ。昔書いた番外編もリライトしたいです。

で、今回のすべさるさんくすは白石みなと嬢です。なぜならあたしに一番不足しているやる気って奴をちよいと刺激してくれたから。いや、本人、そのつもりじゃなかったらうけど。また頼むよ。ぢゃ、みなさんまた会いましょう。

平成十一年十月一日

日栄一賀VS緒方竜 あとがき

相変わらずいじめられっ子な竜ちゃんと、日頃猫被^{ねこかぶ}って大人しくしている一賀ちゃんの対戦でした。これも仕事時間を少々使って三日ほど(実質時間は一日もないはず)で書きました。

この話に出てくる佐々克^{ささかつと}紀は、お茶会同好会のメンバーではありません。一年生の学年首席の超天才児。頭も顔も良く運動神経も抜群でお金持ちですが、性格はごらんの通りあまりよくありません。こんなのを野放しにしているとお茶会同好会メンバーも心が広いよな。

で、彼の特技は数々あるわけですが、手品もその一つです。手先が非常に器用です。あと催眠術を使います。今回一賀ちゃんはいいつにやられたわけですな。竜ちゃんも軽くかけられてたのでしよう。夜遅く下級生に呼び出されてのこのこ出ていくくらいだから。克紀はかなり怪しい奴ですが一応普通の人間です。彼の義理の妹、少^{すくな}は超能力者です。また別の話で出てくるでしょう。

一賀ちゃんは竜ちゃんの言うとおり、結構性悪です。今は環^{たま}女史ラヴラヴなので悪さどころじゃないだけです。

薫ちゃんとの仲については謎。薫ちゃん、一賀ちゃんのこと構うよなあ。

あと、登場人物たちの間では一賀ちゃんが最強と呼ばれているけれど、学園物としての【お茶会同好会シリーズ】男性キャラでは、薫ちゃんが最強。ただ、薫ちゃんは性格がいいのでそう思われてないだけなのだ。

でも、お茶会同好会のメンバーってよく動いてくれるよなあ。書いてる方としてはすごく楽。また、書こ。

ちや、みなさんまた会いましょう。

平成十一年十月四日

日栄一賀VS銀狐 あとがき

やばい人の一賀ちゃんと、まだ怖い者知らずの頃の銀狐の対戦。

前回に引き続き、凄く痛そうな内容です。中坊がそんなに凶悪でいいのか一賀ちゃん。いくら体調不良で頭に來ているとはいえやりすぎだぞ。——でもこの当時まだ一賀ちゃんを止められる人はいなかったんだよねえ。龍騎兵^{ドラグーン}に所属していて、もう薫ちゃんとも面識があったんだけど、薫ちゃんでもまだ無理。だって環^{たま}女史に出会う前の一賀ちゃん、性悪(笑)だし、病人なんだもん。

ラスト、判りづらいかとは思いますが、一賀ちゃん、死にかけてます。——いや、死んでるか。浩己^{ひろみ}も慌てただろうねえ。目の前で死なれちゃあねえ。元々見えてない目をかたに一賀ちゃんのナイーブなハートに(笑)傷を付けようなんざ考えるからそういう目に遭うんだよ。——やいや、やっぱり竜ちゃんといいい銀狐といいい、蔑ろにされてるなあ。(作者から)

でも、本編では「美少年で喧嘩達者」の片鱗も見せない銀狐にしては、よく頑張ってるぞ。体調不良とはいえ、一賀ちゃんに蹴りを入れたのはあんたたちが初めてなんだから。竜ちゃんみたいに小馬鹿にされてないし。

この後、銀狐は一賀ちゃんが最悪と呼ばれなくていいようにある程度守ってやることになりました。腕一本ずつへし折られたのに感心な後輩だねえ。やっぱり腕の中で死なれたのが効いたか、浩己。

高校に入ってからは一賀ちゃんも人が変わったやうし、銀狐もお姉さんたち(笑)の玩具にされちゃうしでいいとこなただけど、番外物で活躍させてやるか。というわけで、そのうち銀狐の恰好良い話もね。

ちや、みなさんまた会いましょう。

平成十一年十一月一日

前回のお話の直後のお話。

最強最悪な一賀ちゃんと甘銀狐とやられ役三高曼陀羅のみなさんの対戦。

今回はどういう訳か今まで通りのページ数に収まりませんでした。だいたい、当初の段階では、この話は銀狐VS三高曼陀羅というタイトルだったのです。それが、銀狐の甘さに我慢ならなくなった一賀ちゃんが乱入し、それをどうにかしようとした銀狐が暴走し、で、いつの間にかこうなっちゃったのです。それにしても五割増とはやりすぎだよ、銀狐。やはり腕の中で死なれたのが効いてたんだな。一賀ちゃん美人だし。

三高曼陀羅は、やられ役ですが結構最後まで尾を引きまます。龍騎兵解散後はやはり最大暴走族ですからな。一賀ちゃんに対しても「どんな手段を使っても」というのを実践してくれまます。まあ、一賀ちゃんはその通りの性格なので困るのは銀狐ってことになるんだけど。がんばれ銀狐、君たちのお姫様(笑)は我が儘で凶暴で虚弱だぞつ。

しかし、こうして見ると、銀狐も結構いい奴じゃん。こと一賀ちゃんに関しては作者の言うことは全然聞かないけど。本編での扱いがあまりに思えてくるわい。待遇改善してやろう。

一賀ちゃんも早くこんな辛い思いばかりしないで済むようにしてあげたいし。環女史、お願いっ。

そして。実は現段階であと四つ話が進行中。薫ちゃんVS龍騎兵、薫ちゃんVS竜ちゃん、銀狐VS竜ちゃん、薫ちゃんVS羅牙さんという対戦。一賀ちゃんシリーズに引き続き、薫ちゃんシリーズ。ふふ。ちや。みなさんまた会いましょう。

平成十一年十二月二十八日

タイトルと中身が甚だしく違ってますね。でも、気持ち的にはこうなんだもん。竜ちゃんのにもね。

しかし、竜ちゃん、このシリーズでは一勝もできてないなあ。あと残ってるお茶会メンバーは、銀狐と征四郎くんだけど、竜ちゃんが勝てるかどうかはやってみないと判らない(笑)。銀狐も蔑ろにされてはいるけど、組めばそれなりに強いからねえ。征四郎くんの方は作者にも全く判らない。だって、彼の実力は真琴ちゃん(美希ちゃんの妹)の振り下ろした真剣を木刀で止めたってことしか記されてないから。でもこの二人の対戦は、薫ちゃんVS竜ちゃんよりあり得ないかも。お互いがお互いに興味が無いんだもん。

ともかく、今回はどうとう竜ちゃん戦わずして負け。ページ数も大幅にオーバーして粘ったんだけど、相手が彩子さんじゃあね。竜ちゃんも聞き入れるしかないよね。克紀もちよいと暗躍(笑)してるけど、薫ちゃんを本気にさせるには至らなかつたねえ。全く楽しませてはくれない。でも、この後この辺りはほとんど不穏になってきて薫ちゃんも手を拱いてはいられなくなってしまう。自分のせいじゃないことと周りの人間が傷付けられてしまうから。某組織の性悪エージェンとも本腰入れて学園物に介入してくるし。

がんばれっ、薫ちゃん。鈍ってる場合じゃないぞつ。

そして、がんばれ私、番外編ばかり書いてる場合じゃないぞつ。番外編だけでイメージ固められたらお茶会の人間も動きづらくなっちゃうぞ。というわけで、本編の方、もっと頑張ります。

ちや、みなさんまた会いましょう。

平成十二年二月七日

自称腰抜けの臆病者薫ちゃんと過保護銀狐の対戦。
竜ちゃんも人が好いけど銀狐も結構人が好いよねえ。一賀ちゃんだけじゃなく薫ちゃんにも手を出すんだもんねえ。まあ、他人の「痛み」が解る彼らにしてみれば、薫ちゃんみたいにもいつも痛そうにしてる人間に傍にいられたら堪らないか。

前作で彩子さんが薫ちゃんの過去について少しだけ話しています。が、薫ちゃんが今みたいな性格になった原因はもともと昔にありません。とても大きなトラウマなので本人の記憶にはありません。本人に色々と言えないから、かえって周りにいる人間には迷惑なんだけどね。銀狐にしても一賀ちゃんの相手だけで手一杯で、薫ちゃんの面倒までは見られないもん。女性陣の活躍に期待、ですね。

しかし、こと一賀ちゃんに関しては作者の言うこと全然聞かないな、銀狐。だって、この話、予定にないでしょ。(前々回、あとがき参照)暴走してるとしか思えん。もうそろそろ沙織ちゃんに戻ってきてもらいたいところです。(笑)

気分を変えてブルーシア編とかやりたいところなんです、ブルーシア編は「こういう」話が本編だから……。ううむ。

結局、お茶会シリーズが一番本編に影響しないんだよね。よし、一度も出てきたことのない人間でやってみるか。沙織ちゃんちの弟たちもいるし。(あ、沙織ちゃんの弟は3つ下と5つ下だからまだか)

ま、とにかく日の目を見ていない登場人物に日の目を見せるシリーズをちよっとやってみるか。(とりあえず口だけ)(笑)
ちや。みなさんまた会いましょう。

平成十二年四月二日

なんだか勢いづいて二日で書いてみました。

本シリーズ初登場、田中の西さんと銀狐の対戦。
うちの女性陣は相変わらず凶暴ですなあ(笑)。西さんは、羅牙さんより凶暴かも。羅牙さんの場合は無敵だから、相手を傷付ける必要がない分お手柔らかだもんね。西さん、容赦ない……。うう。

彼女は「この街きつての銃マニア・機械マニア」ということになってるけど、実際は「手先の器用な機械工作好き」と言った方が正解である。銃以外のものも色々扱っているから。お父さんが警察官なので、そこはそれ、上手い具合に法に触れない程度にやってるんだけど、昔は銀狐が聞いたら怒っちゃいそうなこともやっていた。どんなことかはひみつ。(笑)

沙織ちゃんは、西さんの幼なじみでよき相棒。喧嘩はしない。ただ、すごく付き合いいいので、時々西さんの指定する場所に立たされたり(笑)、西さんに銃を持たされたりするだけ(笑)である。お茶会一のお料理上手。お茶菓子作り担当。

しかし、裕紀も浩己も女の子にはからきしよねえ。
でも、どうする、銀狐。西さんは君たちのお姫様を狙っているぞつ。

しかも容赦しないらしいぞつ。わくわく。
お茶会メンバーもぼちぼち代替わりしないとネタが尽きちゃうんで、ぼちぼち、後輩連中を入れていきますね。

羅牙さんたち最強メンバーが卒業した後、天下を取るの果たして誰かっ？ちなみに一賀ちゃんの後のお茶会同好会会長は、竜ちゃん、その後は西さんになります。(笑)乞う、御期待。
ちや。みなさんまた会いましょう。

平成十二年四月四日

緒方竜VS松本王子 あとがき

シリーズ一のお人好し竜ちゃんと、男版石田沙織と噂される松本王子様(笑)の対戦。

当初の予定では第一話のときのようにならぬように竜ちゃんの負けになるはずだったのですが、男を相手にそんな負けを甘んじて受ける竜ちゃんではありませんでした。勝手に反撃しちゃってもう。

しかも、作者的にはそのままの流れで王子様を退治しちゃうはずだったのに、また勝手に助けちゃうし。ま、天野が呼ばなきゃ助けなかったかも。

羅牙さんの言うとおり、竜ちゃんならあそこであんな風に呼ばれちゃったら絶対に助けようとするんだもんね。でもって、天野は松本の保護者(笑)で、克紀ほど人が悪くないから「何でもいいから助けてー」って気分だしね。確かに松本の実力もまだ信頼してないし。

いやはや、全く。うちって、話の進行が登場人物の性格に依存してるよなあ。

竜ちゃんの再三にわたる勝手な行動のせいで、またページ数が半端になってしまいました。やれやれ。

ともかく竜ちゃんが会長の時代の話まで時間が進みました。しかし、まだまだ登場していないお茶会メンバーも、まだまだいます。初代のメンバーでもまだ出てきてないのいるし。榊征四郎とか。

というわけで、実はもう書き始めてます(笑)。榊征四郎VS碧嶋真琴。二人とも本シリーズでは初登場。真琴ちゃんは美希ちゃんの妹です。何故二人はVSにっ？がなればれ征四郎くんっ。

ぢゃ。みなさんまた会いましょう。

平成十二年四月二十四日

榊征四郎VS碧嶋真琴 あとがき

やれやれ。

こと真琴ちゃんに関しては我を忘れてしまう榊征四郎と、こと美希ちゃんに関しては常軌を逸している真琴ちゃんの対戦でした。

美希ちゃんもこと真琴ちゃんに関してはおろおろモード全開だし。いつもと変わらないのは羅牙さんだけですねえ。

それにしても、征四郎くんにも困ったものだ。真琴ちゃんはまだ中学生だぞ。一目惚れはいいけど勢いがよすぎるわい。美希ちゃんじゃなくても逃げちゃうぞ。ほんと。

とにかく二人の馴れ初めはこんな感じでした。「喧嘩百景」とは主旨が違うような気もするけど。ま、いっか。

こう見えても征四郎くんは結構強いです。竜ちゃんとも互角にやり合うかも。でも、これ以降、高校三年間彼は真琴ちゃんにかかりつきりて、ほかの者などアウトオブ眼中なので対戦の可能性は極少。羅牙さん辺りが面白がってけしかけない限りないかな。

本シリーズもとうとう第十話まで来てしまいました。まだ書きかけのものも三つほどありますし。ほんとに百話までいくつもりなんだろうか(笑)。いったら伝説達成?(笑)

とりあえず長編ものの合間に——今のところ短編ものの合間に長編ものの更新をやってるからなあ——コツコツ続けていきたいと思えます。何にせよ、番外編の方が本編より断然進んでるって言うのは問題だから、本編頑張らなくっちゃね。

本編って言うのはいわゆる【羅牙さんシリーズ】。未だ一作もUPしてません。(いいのかっそれでっ。あうう)

ぢゃ。みなさんまた会いましょう。

平成十二年六月二十日

『喧嘩百景』 第1話～第10話

<http://p.booklog.jp/book/39689>

著者：井沢さと

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/teatimemate/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39689>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39689>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.